

島、鴨、鳥

鴨島ふるさと研究会



「ああ、鴨島」発刊によせて

徳島県知事 三 木 申 三

このたびの郷土史「ふるさと読本、ああ、鴨島」の発刊を心よりお慶び申し上げます。

ご当地、鴨島は、四国三郎吉野川の流れる吉野川平野の中央部に位置し、本県の穀倉地帯として、また昔から交通の要所として、とくに藩政時代には、伊予街道の拠点として栄え、常に本県の歴史の表舞台に出てきており、ある時は激しく叱り、ある時は温かく包んでくれ、大きな恵みを与えてくれる母なる川、吉野川とともに歩んできた「町」として鴨島の歴史は、まさに本県の歴史の縮図と言えるものがあります。

今回、この歴史と文化にあふれた鴨島の移り変わりを克明につづった一冊の書物が発刊されることになりました。関係者の皆様のご努力に敬意を表しますとともに、本書が鴨島にとって明日の発展へ向けての糧となりますことを大いに期待しております。



「ああ、鴨島」の発刊に寄せて

鴨島町長 戸田 稔

鴨島のまちというのは、さまざまな出来事が積み重なって鴨島ならではの地域がつくられてきた、という見方ができます。つまり鴨島には鴨島の物語があると思います。物語ですから、その物語をつくったり、伝えたり、語ったりする人達が重要な役割を担っています。

このたび、鴨島ふるさと研究会が待望の旧鴨島のふるさと読本「ああ、鴨島」を発刊されましたことは、誠に意義深く喜ばしい限りであります。

先人たちの足跡を探求し、郷土を愛し、明日の鴨島を考えることは、すばらしいことでもあります。

どうかこの本を愛読され、豊かな心の糧にいただければ幸甚に存じます。最後になりましたが、本書発刊にご苦勞なされた関係各位に深く敬意と感謝の意を表する次第であります。



ごあいさつ

ふるさと研究会代表 和田 芳

二十一世紀は国際年といわれています。日本は、私たちの想像できなかったほど、高度技術の発達した社会となり、ロボット産業、コンピュータ、バイオテクノロジー時代となりました。そして夢の架橋といわれていた雄大華麗な鳴門大橋もかかり、六十三年には瀬戸大橋も完成されると、四国縦貫道路のパイプによって、まさに四国は一つとなります。

若者の活躍が期待される時代となります。

しかし、私ども老人は、「温故知新」の思いがあります。現在の発展の原点に、私どもの祖先が機械にたよらない人の力、努力、根性で築きあげてきた経済、文化の上に出来あがったものと考えます。従って祖先の歩まれた道をたどって見ることも大切と考えています。

天寿会活動としては、十年前「飯尾むかしむかし」の本が、故深見定一氏を中心に発刊されています。そのことが県下の刺激となりました。旧鴨島の方々にもお話いたしましたところ、御賛同を得まして、五十七年七月から、毎月第二水曜日に老人福祉センターに集まるようになりました。テーマをそれぞれ話し合っ、資料集めに取りくみました。その時より井内衡様の親切なご指導のもとに、熱心に取り組むことが出来まして、何時の間にか五年の歳月がたち、出版することになりました次第です。

私は上板から嫁ぎ六十年、人生八十年を生き抜きました。最後の大事な仕事様が皆様のご協力によりまして出来上がりましたことを心から喜ばしく思います。町当局も戸田町長はじめ厚生課の方々に物心両面からご協力いただきました。編集委員の皆様には、数多くのご労作に感謝の気持ちでいっぱいです。「よくやれた。よい本ができた」と自我自賛していますが、まだまだ不備な点があると思います。

しかし、藍・製糸で栄えた町として有名だった鴨島の昔のことを、少しでも若い方々に知っていただきませすれば、当初の目的を達すると思っております。

私どもが、精魂こめたこの一冊、是非とも皆様の書棚にかさっていただき、お孫さんと一緒にお読みさるようお願い申し上げます。

目次

	第一章 ふるさとの川	1
	第一節 川に学ぶ	3
	1、はじめに	3
	2、吉野川、この恵みの大きさ	4
	3、四国三郎は暴れ川	5
	4、鴨島も中島地帯	8
	5、地名は川のさずかりもの	9
	6、吉野川の名づけ親	12
	7、江川の沿革	13
	8、天然記念物「水温異常現象」	14
	9、飯尾川の沿革	14
	10、とりもどそう、美しいふるさとの川を	15
	第二章 江川物語	17
	第一節 江川	19
	1、絵のような夏の江川	19
	2、江川の前身、南吉野川	20
	3、江川かいわいの昔話	27
	4、水車小屋の思い出	30
	5、変貌した江川	31
	6、江川今昔 その一	33
	7、江川浚渫工事とその意味	35
	8、今昔の感深し、いぢ川周辺	37
	第二節 飯尾川	39
	1、飯尾川の流路	39
	第三節 阿波中央橋	46
	1、阿波中央橋の前身、源太の渡し	46
	2、源太の渡し架橋工事の思い出	48
	3、源太の渡し賃	51
	4、戦争で遅れた中央橋	51

5、町勢要覧の記録……………52

第四節 ま と め……………54

1、江川物語……………54

第三章 吉野川の歴史……………59

第一節 古 代……………61

1、栗国の開拓者・忌部氏……………61

2、律令制と阿波国……………62

3、荘園制と貴族の滅亡……………64
4、源平の盛衰と平康頼……………65

第二節 中 世……………66

1、阿波野をかけた鎌倉武士……………66

2、土御門上皇は阿波で亡くなった……………68

3、阿波の南北朝の戦い……………69

4、手中にあった足利幕府……………70

5、覇権を夢見た三好勢……………73
6、阿波の内乱と勝瑞の最後……………77
7、歴史のかげに美女……………79
8、庶民の台頭と自由の芽ばえ……………80

第三節 近 世……………82

1、蜂須賀家政列伝……………82

2、秀吉の検地……………84

3、身分制(完璧な人民支配)……………86

4、検地その後の農村のしくみ……………88

5、鴨島の庄屋……………90

6、差別と戦ったコルネリア……………94

7、藩政期の藍騒動……………96

(1) 五社宮事件……………96

(2) 藍にまつわる腐敗政治……………97
(3) 夢やぶれた藩政改革……………98
(4) 牛島村「監物堤」……………99
(5) 飯尾村「義人弥五郎」……………100
(6) 公儀巡見使の行列……………101
(7) 蜂須賀公の鷹狩り……………102
8、大塩平八郎・阿波人説……………103
9、藩政末期の動揺……………105

10、鎖国に消えた英雄	106	11、「ええじゃないか」が日本を救った	108
第四節 近 代			

1、版籍奉還と淡路の悲劇	110	3、淡路の殿様・稲田九郎兵衛	113
2、淡路はかえらぬ島となった	111	この章のまとめ	114

第四章 阿波の藍

第一節 藍学習報告	119		
-----------	-----	--	--

1、阿波藍と家政	119	4、藍の栽培と藍染	123
2、藍作の隆盛と増税と	120	5、阿波藍の落日	124
3、藍作専売制と農民の生活	121		

第二節 藍づくり	125		
----------	-----	--	--

1、藍づくりの労苦	125	4、藍作座談会	134
2、知恵島地区での藍づくり	131	5、阿波藍の栄光の軌跡	135
3、藍の思い出	132		

第三節 藍 有 情	139		
-----------	-----	--	--

藍商カネマンの覚書	139	(3) 川真田氏のこと	140
(1) はじめに	139	(4) 鴨 島 城	141
(2) カネマンのこと	140	(5) 藍商人カネマン	141

第五章 蚕都かもじま

第一節 養蚕製糸学習	155		
------------	-----	--	--

1、養蚕の歴史	155	3、蚕都かもじま	159
2、製糸業の勃興	156	4、工場参観の記	160

第二節 筒井製糸の全貌 162

1、はじめに 162

2、筒井製糸の沿革と背景 163

3、工場配置図と設備 166

4、病床・筒井直太郎氏談 169

5、筒井式繰糸機 172

第三節 養蚕業の思い出 183

1、昭和三十年頃までの養蚕 183

2、沖繩離島生活の思い出 192

3、藍にかわり台頭した蚕糸 197

4、生糸の輸出経路および売買方法 199

第六章 菊の鴨島 205

第一節 鴨島名物菊人形 207

1、華やかし頃の記録 207

2、鴨島大菊人形の紹介 208

第二節 鴨島の菊と私 215

1、私の第一印象は「菊人形の町・鴨島」 215

2、菊のお話いろいろ 216

3、菊人形と菊遊会 217

第三節 鴨島の菊づくりの歴史 224

4、和田千賀一氏の後を継いで 219

5、新しい新品種を求めて 220

6、大戦後も有楽座とともに 222

7、鴨島の発展を祈りつつ 223

6、職工募集と養成方法 173

7、筒井製糸所の賃金支給法 175

8、奨励会と慰安会 177

9、生糸の検査 178

10、続筒井製糸の沿革 179

5、蚕糸業に一大革命をもたらした筒井製糸(株)を偲んで 200

6、片倉製糸会社と鴨島工場について 202

鴨島の菊は世界一 212

鴨島の菊のはじまり 214

第七章 神社・仏閣の記

第一節 鴨島の神社

1、鴨島の菊花展の推移	224	5、菊遊会は江川遊園地へ(昭和四十一年)	233
2、華やかだった頃(大正十二年～昭和十五年)	226	6、鴨島町菊花愛好会結成(昭和四十九年)	235
3、戦争中の菊遊座	230	7、鴨島駅前菊花形展示はじまる(昭和五十二年)	237
4、鴨島の菊の復活(昭和二十四年～昭和四十一年)	230	8、菊づくりの苦勞	239

1、昔の社寺の伝言	243	(4) 秋葉神社の夏祭り	250
-----------	-----	--------------	-----

2、鴨島八幡神社	244	(5) 和氣あいあいの秋葉講	251
----------	-----	----------------	-----

3、秋葉神社	246	4、喜来若宮神社	253
--------	-----	----------	-----

(1) にぎやかだった秋葉はんの夜市	247	5、若宮八幡神社 — 上下島 —	255
--------------------	-----	------------------	-----

(2) 心に残る「秋葉はん」の夜市	249	6、杉尾神社	256
-------------------	-----	--------	-----

(3) さびしくなった秋葉町	250		
----------------	-----	--	--

第二節 鴨島の寺院

1、徳住寺	258	2、常教寺	260
-------	-----	-------	-----

第三節 信仰

1、黒住教	261	4、乗島郷の由来と伝説	271
-------	-----	-------------	-----

2、鴨島の庚申さんの調査研究	262	(1) 弘法大師と藤井石見守の伝説	271
----------------	-----	-------------------	-----

(1) はじめに	262	(2) 金屋・中屋・江戸屋	273
----------	-----	---------------	-----

(2) 庚申信仰が起こった由来	263	(3) 岸田六郎左衛門	274
-----------------	-----	-------------	-----

(3) あとがき	268	5、中塚のお地藏さん	275
----------	-----	------------	-----

3、ご先祖の祠	269		
---------	-----	--	--

第八章 鴨島の建物の変遷 世の中のうつりかわりその1

第一節 鴨島の建物の今昔

1、はじめに 279

2、寺社の建物 280

3、農家の建物 281

4、町家の建物 284

5、昔の鴨島繁華の中心 286

6、建物変動の著しい地区 289

7、思い出の建物 293

(1) 駅前井上新聞店 293

(2) 川真田徳三郎氏邸 294

(3) 川真田市兵衛氏邸 295

(4) 役場前町道と国道の間 306

(5) 国道より南 307

(6) 駅前より文楽通り 303

(7) 文楽通りより県道まで 305

(8) 県道より役場前通りまで 305

(9) 初めての鉄筋コンクリート建 302

(10) 夜の歓楽街の秘話 301

(11) 川真田本家こぼれ話 300

(12) 鹿島屋の屋敷街 296

(13) 鴨島東部の官公庁団体街 303

(14) 駅東より文楽通り 303

(15) 文楽通りより県道まで 305

第九章 エネルギーと交通の発達 世の中のうつりかわりその2

第一節 灯りの歴史 311

第二節 燃料の歴史 315

第三節 乗物の変遷 320

1、川舟交通 320

2、陸上交通 321

3、貨物輸送 327

4、その他 329

第十章 昔の食生活 世の中のうつりかわりその3

第一節 農家の食物 333

1、主食 333

2、副食 336

3、農具の発達 341

第二節 時節の食べ物 342

第三節 戦争中の料理のこと 〈座談会〉 346

第四節 衣・食・住の話 349

第十一章 保健衛生 世の中のうつりかわりその4

第一節 恐怖の伝染病 355

1、恐ろしがられた癩病 355

2、あばたの残る天然痘 356

3、肺 結核 357

第二節 昔の傷病治療 362

1、昔の治療 362

2、昔使った薬 362

3、漢方 医(天明〜明治二十六年) 363

4、洋 医(明治三十年頃) 364

(1) 明治三十年頃〜明治三十八年 364

第三節 人びとを悩ませた害虫 368

第四節 戦後の疾病予防 373

第十二章 教育 世の中のうつりかわりその5

第一節 教育の返遷 377

1、明治以前の教育 377

2、上下島の寺小屋 378

4、働き盛りの人を死なせた流行性感冒 358

5、赤痢 359

6、人にいえない花柳病 360

(2) 明治三十八年頃〜大正六年 364

(3) 明治四十三年〜大正十二年 365

(4) 大正七年頃〜昭和十年 366

5、齒科 医 367

6、薬剤 師 367

3、寺小屋と近代教育 379

4、明治五年以降の教育史 380

(1)	明治初期	380	(4)	昭和初期	383
(2)	明治中期～明治末期	382	(5)	戦時体制下	384
(3)	大正時代	383			

第二節 公 教 育

1、鴨島尋常小学校	384	7、学 用 品	384
2、三村高等小学校	388	8、生徒の遊び	394
3、尋常高等小学校	390	9、生徒を悩ませた寄生虫と皮膚病	395
4、先生の服装	391	10、明治四十四年以降	396
5、生徒の服装	392	11、女は三人だけの学校	397
6、女生徒の服装	393	12、尋常高等小学校の授業	397

第三節 私 学 教 育

1、学校法人鴨島学園とキリスト教	398	(4)	戦後の鴨島学園について	401
(1) 鴨島学園の発生について	398	(5)	めぐみ幼稚園の誕生について	402
(2) 鴨島裁縫女学校から女子高等学校へ	399	(6)	その後のめぐみ幼稚園	403
(3) キリスト教と学園のかわり	400			

第十三章 文化とスポーツ

第一節 文 化

1、森本茂家に古文書を秘蔵(その目録)	409	(3)	「源太渡し」沈下橋開通の祝賀歌	415
2、鴨島で生まれた歌	414	(4)	鴨島小唄	417
(1) 鴨島町制施行祝賀の歌	414	(5)	鴨島小唄	418
(2) 旅順開城記念の歌	415	(6)	菊のかおり	418

(7) 鴨島銀座は恋の街 419

(8) 五九郎音頭 420

第二節 スポーツ 432

1、打毬 432

(1) 打毬の振興に貢献した藤井茂市 433

(2) 藤井茂市氏あて競技通知書 435

(3) 馬術の権威・藤井氏の妙技 436

(4) 麻植乗馬クラブの誕生 437

第十四章 昔の子どもの歌と遊び 443

第一節 子どもたちの歌 445

1、季節的な歌 445

2、いつでもどこでもうたった歌 447

3、手毬つき歌 448

4、足くぐり毬つき歌 450

第二節 昔の子どもの遊び 453

1、はじめに 453

2、行事の中での遊び 453

3、平常の遊び 458

4、昔の子どもは市が好き 463

5、上下島と飯尾の石合戦 464

3、鴨島町の川柳史 421

4、鴨島の方言調査 426

(5) 打毬の思い出 439

(6) 打毬座談会 440

2、暁テニスクラブ 441

(1) 暁コートでの思い出 441

3、体育協会のはじまり 442

5、ボールつき歌 450

6、手あわせ 450

7、おじゃみの歌 451

6、昔の子どもの遊び研究レポート 466

(1) 子守り 466

(2) 藩政時代の子どもの遊び 466

(3) 年中行事と遊びと考察 467

(4) まとめ 469

第十五章 鴨島での兵事と軍歌

1、鴨島での兵事 …………… 473

(1) 徴兵検査から入営入団 …………… 473

(2) 赤紙から出征 …………… 475

2、郷土の戦病死者 …………… 477

3、第二次大戦中の生活 …………… 479

4、大戦下の桑皮集荷と真綿拵げ …………… 481

5、青雲閣と被災者 …………… 483

6、終戦日前後に於ける朝鮮での一部状況 …………… 485

7、軍歌 …………… 488

第十六章 鴨島の町勢

1、鴨島町沿革史 …………… 495

2、旧鴨島の町村長史 …………… 497

(1) 初代 松島廉一郎 …………… 497

(2) 二代目 川真田鹿太郎 …………… 497

(3) 三代目 武智加之吉 …………… 498

(4) 四代目 花楸筆太郎 …………… 499

(5) 五代目 川真田郁夫 …………… 500

(6) 六代目 大島佐三郎 …………… 503

(7) 七代目 川真田高太郎 …………… 504

3、町勢要覧にみる変遷 …………… 506

4、地図にみる町勢 …………… 509

5、本町の将来 …………… 510

6、温故知新の心から …………… 511

第十七章 風俗つれづれの記

第一節 わが町の聞き取り帳 …………… 515

1、鴨島での銀行のはじまり …………… 515

2、きんきらの鉱石道 …………… 516

3、大切だった綿布 …………… 517

4、昔の奉公の苦勞 …………… 518

5、農協の前身・産業組合の設立 …………… 520

6、にぎやかだった昔の葬式 …………… 522

7、戦後の天皇階下の御巡幸 …………… 523

8、火の海がせまる大火 …………… 524

第二節 私の断想 …………… 526

1、ふるさとの誇りを守ろう	526	3、散歩 偶感	529
2、鴨島小学校の旧門柱のこと	528	4、ああ、わが町鴨島	529

第三節 狸 物語

1、ゆうねんの狸	531	5、磯田の大杉の狸	534
2、六助 狸	532	6、下駄切り狸	535
3、風呂好きのいじ川狸	533	7、ほしがり狸	536
4、北川の狸	534	8、狸を祀る祠	537

第十八章 本町の生んだ偉人

第一節 人物史概況

1、本町の生んだ偉人あらまし	541
----------------	-----

第二節 経歴紹介と秘話

1、江川堤の功労者—川真田市兵衛—	543	6、朝鮮干拓王—藤井寛太郎—	557
2、第一回衆議院議員—川真田徳三郎—	543	7、コンクリート船の発明—武智正次郎—	562
3、高野山大僧正—泉智等—	544	8、鴨島公園を寄付してくれた —石油王 松村善蔵—	564
4、ノンキな父さん—武智故平—	547	9、東京計器の創始—和田嘉衡—	565
(1) 曾我廼家さんの講演記録	548	10、セメント業界大黒柱—松島清重—	568
(2) 「ノンキナトウサン碑に寄せて」	552	11、黄銅界の重鎮—松浦貞勝—	569
5、セメント・石油・アスファルトの開発 —寺田洪一—	555		
第三節 近隣出身の先覚者	571		
(1) 芳川 顕正	571	(2) 須見 千次郎	571

第十九章 鴨島に名を残した人々

(8)	阿部 邦一	572
(7)	岡田 勢一	572
(6)	藤井 真信	572
(5)	工藤 茂三郎	572
(4)	石原 六郎	572
(3)	近藤 康平	571

(13)	林 雲谿	573
(12)	堀江 薫雄	573
(11)	松村 守平	573
(10)	松村 善蔵	573
(9)	堀江 邑一	572

第一節 産業 関係

1、	県政界に選出された―中尾英一―	577
2、	大商人ひょうたんや―鈴木長三郎―	578
3、	髭 さん―川真田治助―	580
4、	鉄道の父―日野甚太郎―	582
5、	松浦製糸場を支えた―松浦タケ―	584

第二節 芸術 関係

1、	絵筆を揮った大家たち―西条竹重・泉智等・筒井サイ・小原ハチ子―	586
2、	菊作りの名人―佐尾山忠作―	588
3、	写真師のはじまり―田村三十郎―	589
4、	歌舞伎の名人―江戸武律三―	589
5、	芝居客席の取締り―大西宇蔵―	590
6、	寺小屋の師―菊川消雲師―	591

第三節 名工 関係

1、	宮大工―渡辺莊吉―	594
2、	北刃の豪邸を建てた―吉坂由太郎―	595
3、	左官の親方―乾儀助―	596
4、	あんま針灸師―久保利九郎―	596
5、	車造りの名人―相原善蔵―	597
6、	藍のすくも水師の名人達―武智兵吉・林虎蔵―	597

第四節 名物男・名物女

名物男・名物女	598
---------	-----

第二十章 私の歩んだ道

- 1、手風琴をひいて薬売り—中野喜之助— … 598
- 2、中野の「おヨネはん」—中野ヨネ— … 599
- 3、自転車きちがい—瀬尾和三郎— … 600
- 4、取りあげ婆さん—筒井カメ— … 601
- 5、髪結師—岸田おろく— … 602
- 6、喜来の棒術師—島村弥平— … 602
- 7、親分肌の消防組長—川真田泰蔵— … 603
- 8、兵隊ばあさん—金山マキ— … 604
- 9、麻植郡史編集者—久保忠男— … 606
- 10、兄弟敵対戦争の悲劇—岡本兄弟— … 607
- 11、映画撮影所を誘致しようとした
—宮脇由蔵— … 609

- 1、鴨島女子専門学校まで—森サワイ— … 613
- 2、私のおいたち—鈴木花子— … 616
- 3、こまねずみのように—三倉マスエ— … 621
- 4、槇の門の思い出—本村真喜雄— … 622
- 5、私の第一の母校は鴨島小学校—梶博久— … 628
- 6、油屋家業の変遷を追って—川真田晋— … 636
- 7、ふるさとと私の思い出—奥本彦市— … 639
- 8、「かたぶつ」でとおした人生—浦島武一— … 643

- はげましの手紙 … 645
- ご寄稿いただいた方々 … 645
- 編集委員 … 646
- 経過及び編集報告 … 647

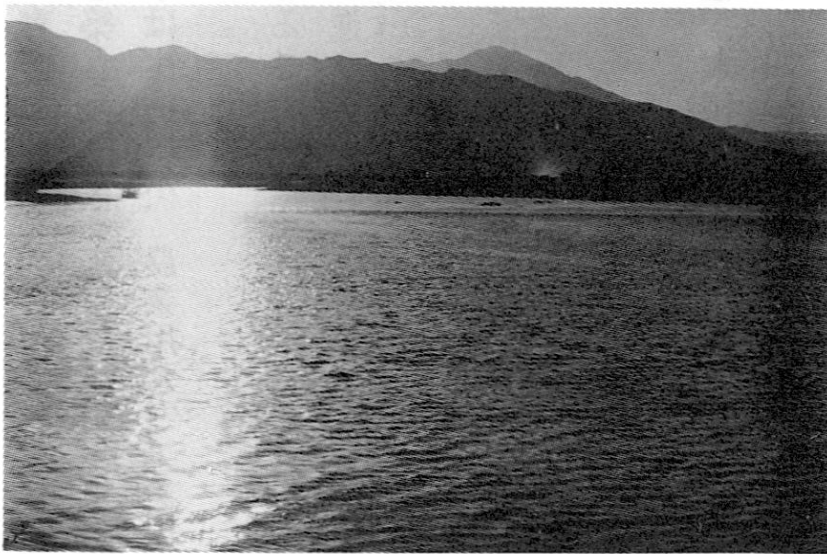
第一章 ふるさととの川

第一節 川に学ぶ

1、はじめに

ふるさと研究会の皆さんが、思い思いに昔を語るなかで、美しいふるさとの川「江川」に、驚くほどの執着があり、話題に出なかった日はありません。いつまでも美しい自然を守り、残しておきたいという切羽つまった気持なのです。汚れた現在の江川からは想像も及びませんが、つい最近まで、江川は人々の心のうらおいとやすらぎをそそいでくれる「いこいの場」となっていたのです。

川に育った者が、川に学ぶことは、水を愛する心を失わないということなのです。豊かな時代となった今日の私たちは、母なる川をみつめ、水の減るのを、ヘドロ化するのを嘆くのですが、私たちの心もそうなっていることに気づくべきでないでしょうか。何故なら、川は政治や人の心の鏡といえるからです。水は、流域に住むすべての動植物の生命を維持してくれます。人間も例外ではありません。



吉野川

古い時代から、人間は自分たちの食糧として、動植物を捕ったり、育てたりして共存してきました。その手段や方法はしだいに高度になり、人間は産業を起こし、文化を築きあげてきました。しかし、いつの時代にあっても、水がそれらの原動力となってきたのです。川の水は生活用水、農業用水、工業用水となつて、人々の生活風俗までも決定づけているのです。

そういった意味で、私たちがふるさとの川について学ぶことは、ふるさとの歴史を知るうえで最も近道です。川は人々の喜びや悲しみ、成功や失敗、社会の発展、文化の進歩など、ことごとくをその中に秘めて、必要に応じて示してくれるのです。まさしく人間の教えの「源」です。

2、吉野川、この恵みの大きさ

忌部一族が吉野川に肥えた地を求め、麻植郡を開拓してからの麻植。大化改新後の国府、鎌倉時代の石井をあわせて七〇〇年、南北朝からの土成、室町戦国時代の勝端で二四〇年、そして蜂須賀入国から四〇〇年の徳島と、阿波の中心は、つねにこの川の流域に位置しています。

それはかつての藍作や、蚕都の鴨島で示されたように、この川の運んだ土によってもたらされているのです。

流れは、時として変わり、運河を整え、重要な交通路となつて、時々の国司・守護・部将たちが、阿波藍や産物がひしめきあつて上下したのです。明治になつてからも、人々は堤防を築き、田畑を守り、農業用水路をみちびき、畑を一大米作地に変えました。人々がゆきづまると、生活の智慧を教えてください。豊富な水は、不足で悩む他県を救い、先端産業といわれる精密電子工業の花を咲かせてくれるのです。

る「源」^{なもと}なのです。しかも、これらの恵みは永遠の流れのほんの一部にすぎないので。

3、「四国三郎」^{しこくさぶろう}は暴れ川

吉野川は、利根川の板東太郎、築後川の築紫二郎とともに別名をもつ暴れ川です。高知県土佐郡の瓶ヶ森山から延長一四六六・一キロで、支流一二四、流域面積は三五六〇平方キロです。高知県の上流域は年雨量三〇〇〇ミリをこえる多雨地区です。徳島が晴天であつても、洪水に襲われたこともありました。毎年のようにくりかえされる水害に、人々は恐れおののきました。しかし考えてみれば、水の怒りも人間のつくりだしたものなのです。人々が山地や台地で狩猟生活をしていたときには起きなかつたはずです。人々が生活の場所を、平地に求めたときからそれは始まったのです。人々は何故に犠牲の大きい平地を選んだのか。それはこの土の恵みがるかに大きいことを知ったからです。そして、人々は長年の経験を生かし、水に備える知識を積み重ねてきたのです。だからいつの時代でも、流域の人々は水をどのように治め、土をどのように生かすかを、政治経済の課題としてきたのです。川と人の調和された姿、それは容易ではありませんが、ヘドロに化した江川や飯尾川は、私たちがしでかしたことなのです。蘇^{まが}えらさなければなりません。一人ひとりが汚れを出さないような生活習慣を身につけるとともに、政治的にも目を向けてもらわなければなりません。例えば、会員が提案したポンプアップや麻名用水との連絡によって、流れをとりもどすことも名案だと思えます。

九州のある町は、小学校にプールをつくらなかつたそうです。町民は川を汚さないように気を配り、子どもたちは、きれいな川で水泳ができることが自慢になったそうです。大人から子どもへ、こんな大き

な贈物ができたなんて驚くほかありません。そして、美しい自然で育った若者が、次々とアイディアを興し、過疎で悩んでいた村を、観光客や有名人の移住希望者が殺到する町に変えてしまったのです。私たちがだって決して決してできないことではないと思います。

災害年表

(参考資料 吉野川)

西暦	年月日	記事	西暦	年月日	記事
六六四	白鳳 二・二〇・二四	土佐沖大地震	一七〇七	宝永 四・二〇・四	紀州沖大地震
七〇二	大宝 二・九	阿波国うえる	一七三三	享保 七・六・八	大雨、四三〇余戸流る
七〇四	慶雲 一・四	阿波国苗損ず	一七三六	享保 二	洪水
七三三	天平 五・三	大干害で五穀みのらず	一七六六	享保 三・九・二四	阿波国大水、農作害九万石
七四	天平 六・四	大地震	一七九	享保 四	阿波国大水、農作害二二万石
七三	天平宝字 七・八	南海諸国が干害	一七三三	享保 一六・八	大暴風雨、農作害一二万石
七五	天平神護 一・七	阿波国干害	一七三三	享保 七	大いなごが異常発生
八三	弘仁 四・七	美濃、阿波両国うえる	一七三六	元文 三・六	洪水河堤を決す
八六	仁和二	吉野川大洪水	一七五	宝暦 六・九	暴風雨、このころ連年災害
一〇九	承徳 二	吉野川大洪水	一七五	明和 二・六	暴風雨、八月に長雨
一三二	正平 一六・六・二四	南海道大地震	一七三	安永 一	夏大水、秋また風雨
一五九	天正 七・八	大水去らぬこの三日	一七四	安永 三	夏秋洪水
一五二	天正 一〇・九・五	阿波国大洪水	一七六	安永 七・八・八	風水害
一六四	慶長 九・三・二六	大地震	一七三	天明 二・七	連年洪水
一七二	元禄 一四・七・二六	大洪水(舞中島全戸流失)	一七九	寛政 三・四	板野地方大水害、秋祭中止

一八六	文	化	一三・八	風雨洪水、海岸に高潮
一八三	文	政	五	阿波郡干害
一八三	文	政	六・八	夏干害、秋洪水
一八六	文	政	二・八	暴風雨
一八三	天	保	三	干害
一八六	天	保	七	夏秋大雨続き、大凶作
一八七	天	保	八・四	長雨で農作害、草根を掘る
一八六	天	保	九	またききん
一八四	天	保	三	夏大干害、諸民苦しむ
一八四	天	保	一四・七・五	吉野川大洪水
一八七	弘	化	四・八	吉野川著名の大洪水
一八四	嘉	永	二・七・八	酉年の大水、城下にあふる
一八五	嘉	永	三・四	連年大水
一八五	嘉	永	五・七・二	風雨出水、子の大小という
一八五	嘉	永	六・七	干害、飲料水がない
一八四	安	政	一・二・四	大地震
一八七	安	政	四・八・一	吉野川大洪水、八朔水
一八六	万	延	一・五・五	別宮川筋、名西大洪水
一八三	文	久	三・八・二	板東地方大水
一八六	慶	応	二・八・五	連日の豪雨で寅年の大水
一八七	慶	応	三	板野地方大水
一八〇	明	治	三・九・九	吉野川大洪水
一八七	昭	和	六・一〇・三	大水、同九年にも大水
一八三	昭	治	六	大干害
一八四	昭	治	一七・八・六	暴風雨、流家七九戸
一八五	昭	治	八・六	降雨続き吉野川大洪水
一八六	昭	治	九	干害
一八九	昭	治	三	暴風雨
一八九	昭	治	三	徳島県下大雨、諸川洪水
一八九	昭	治	二五・九	干害で凶作
一八四	昭	治	七	凶作、減収三割二分
一八七	昭	治	三・九	吉野川大洪水
一八九	昭	治	三・八	吉野川大洪水
一八九	昭	治	三・七・九	吉野川大洪水
一九〇	昭	治	四	夏干害、八月大暴風雨
一九一	昭	治	四・八・六	吉野川大洪水、土佐水
一九二	昭	治	一・九・三	吉野川大洪水
一九三	昭	正	一	西のから風で稲全滅に近い
一九五	昭	正	四	水害
一九〇	昭	正	九	水害、干害
一九五	昭	正	四	水害、干害
一九七	昭	和	二	干害
一九六	昭	和	三	吉野川大洪水
一九三	昭	和	六	干害
一九四	昭	和	九・九・二	室戸台風
一九九	昭	和	四	大干害

一五〇	昭	和	二〇・九・二七	吉野川大洪水
一四九	昭	和	三・三・三二	南海大地震
一四八	昭	和	二四・七・三三	豪雨で吉野川沿岸水害
一四五	昭	和	二五・九・三三	ジェーン台風、キジア台風
一五一	昭	和	二六・七・一	ケイト台風
一五二	昭	和	二六・二〇・二四	ルース台風
一五三	昭	和	二七・六・三三	ダイナ台風
一五三	昭	和	二六・九・二六	宮河内谷川決壊
一五四	昭	和	二九・九・二四	吉野川大洪水
一五五	昭	和	二四・九・二六	伊勢湾台風

4、鴨島も中島地帯なかのしま

吉野川は、恐しい洪水を流す川でしたが、一方では、浸食・運搬・堆積の働きをそれだけに果たす川であります。昔入海であった徳島に平野をつくりあげたのです。

流れは山間部から平地にでると、ゆるやかに土砂を堆積し始めます。そこは浅瀬となって、横に浸食する力が働き、曲りくねります。そして洪水がおおると、強い力で新しい道をつくるのです。こうして曲りくねったあとが三ヶ月形の池として残ります。

傾斜の少ない下流部にでると、ゆうゆうとした流れとなって、土砂を堆積するばかりですが、洪水のときは、これを再び浸食します。いつしか自然堤防や中島なかのしまを形成していきます。鴨島はその自然堤防の上に発達しているのです。島・須賀などの地名が多いことからわかります。

鴨島付近での流れは、南から北へと変化しています。かつての本流は、飯尾川に続いていましたが、川島丘陵や向麻山につきあたって、変化したのか、河跡湖・旧河道が残されています。牛島の市瀬橋の東などは川幅が広く、本流時代をのぞかしています。藩政末期の記録にも、「古老の伝聞によると、飯

尾川は吉野川の古流という……」と記されています。近くの老人に聞けば「昔は帆かけ舟が藍俵やニシンカスの積みおろしをしていた」と話してくれます。

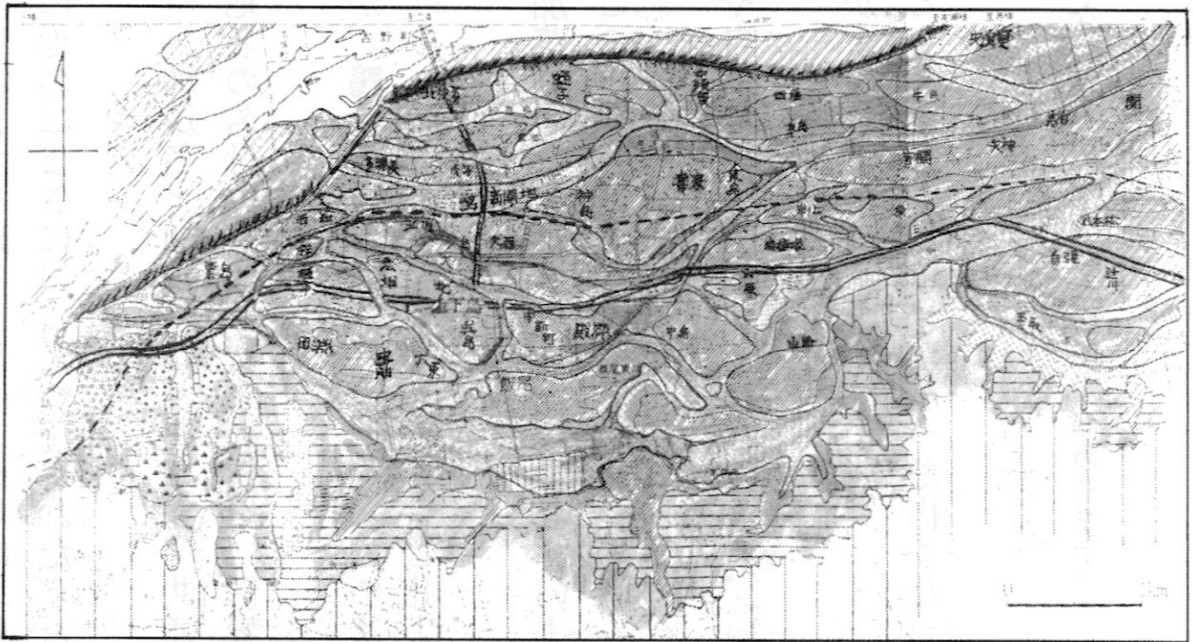
川島丘陵では、流れは北におされ、江川に変わっています。人工堤防のないこれらの旧河道は、洪水ごとに土を運んでは積み重ねたのです。

飯尾川も江川も流域はほとんど平地なので、洪水もさまざまじかったはずですが、藍作農民にとって、それを待ち望んだという複雑な心を知るのは川のみでありましょうか。

※ 藩政時代、藍作中心の地帯（中島）は、「阿波の金庫」といわれ、藍園二八ヶ村の中に鴨島も数えられていました。

5、地名は川のさざかりもの

先でふれたように、旧河道が南にあったことは、南の流れと北の流れの間に、中島が形成されました。本町の地名は、上下島、鴨島・乗島・神島など川中の島や浅瀬を意味するところがほとんどです。



吉野川の旧河道

地名については、西麻植の植村芳雄氏が多年にわたり研究されています。氏によれば、地名は地形、地質、地勢によって多く名づけられているのだそうです。鴨島の地名はまさに川に名づけられたと言えるのです。

鴨島

「鴨」は、加茂からでています。県内では、三加茂町・加茂名・加茂谷などがあり、共通することは、川沿いの土地であることです。こうした地名の名付け方は、文字の使用に影響を受けて変化しています。

中国と北朝鮮の境を流れる川を「鴨緑江」と呼ぶが、鴨は音読みが「アウ」で、ここは水の緑色が、水鳥のかもの首の色に似ているので名付けられています。水の色を使った川は黄河もそうです。

日本で有名なのは、京都の北区・左京区の一部の加茂です。流れる川を加茂川といいます。鎌倉時代（一一二二年）の「方丈記」の鴨長明は、この川をとって、鴨の字を使っていることから、加茂から鴨となったことが理解できます。

その外、新潟県の加茂市も、京都の加茂も扇状地や自然堤防の上に来たところで、いづれも水を利用した繊維・織物の産業の地です。

鴨島の場合も同じで、川に関係していることは確かなのです。島がかも（水鳥）に似ていたのでしょうか、それとも蒲など（水草）が茂った様子だったのでしょうか。

※その他、中島のかみの島、上島から神島となり、鴨島となったとかいろいろ伝説もあります。

呉島

昔は鴨島全域を呉島と呼んでいた時代がありました。(第三章二参考) ここも砂れき地の川原であったことから名づけられたと思われれます。

*伝説

この地名は、中国の呉の国から織女が六人きて、織物技術を指導した地だから、飯尾の唐人などの近隣の地名とあわせ呉人伝説が生まれたと思われれます。

殿郷

殿郷のあて字、どんごは泥地の意味であり、出水ごとに泥土を運び込まれ、水のたまった低地です。

昔、豪族が居たからだという人もいますが、「郷」とは大化改新から、面積の大小にかかわらず、五〇戸単位につくられたもので、後にこじつけてつくった話なのです。

*伝説

殿郷という名の起りは、この地に郷長が住んでいたからであり、飯尾川沿いもかつては、城ノ南という小字名が残っていたといわれます。

乗島

ジョウとは畑地につけられる地名であり、出水ごとに水の乗る島の意味です。豪族乗島入道来心が居住していたからという人もありますが、姓名は、鎌倉武士より地名を名のるようになりしました。(第三章中世(一)参考)

天島
上下島

天とは、地名でも高いところにつけられます。ここも河岸段丘の高い土地です。上下島とは、呉島の字を草書体で書いているうちに、二字に分かれたものです。旧江川の河跡で、最近まで家もなかった低地です。現在も呉島の小字名が残っています。

喜来

キラキラと河原の石が輝やくさまに名づけられました。ここも江川の川原地であります。

麻植の伝説

忌部氏が活躍していたころ粟がよくとれたから「粟国」となり「阿波」となったように、麻を植えたから「麻植」となったといわれますが、弥生時代にはすでに稲作が行われていたし、絹が生産されていたのも明らかです。呉国よりわざわざ絹より麻を輸入し、麻織物をしたとは考えられないのです。なんとすれば、中国の絹を求めて、かの有名なシルクロードはできたのですから。

6、吉野川の名づけ親

吉野川とは誰が名づけたのでしょうか。「阿波拾穂集」という古い本には、この川は広々と北山と南山の間を流れていたが、ヨシやアシなどでおおわれていたので『ヨシのかわ』と唱え、現在の字に改めたと書かれています。江戸時代には「芳川」とも書かれています。下流は水草を茂らせていた広々とした湿地帯であったにちがいません。

また、ある本では、蜂須賀入国後からで、古くはただ「大川」と呼んでいたとも書かれています。世界的に有名なライン川でも、家の前にある川を「前川」と呼び、裏に流れる川を「裏川」と名付けているのです。こうしていくつかの支流は呼び方が異ってしまうのだそうです。

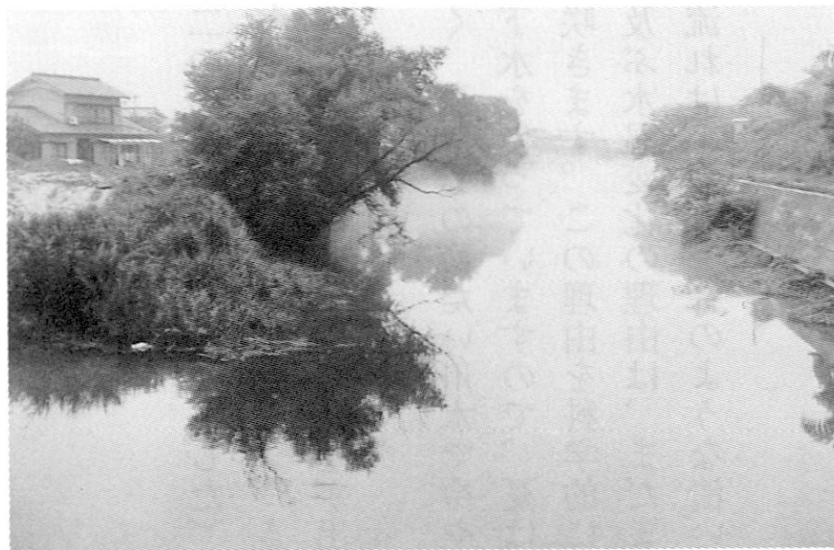
吉野川は、旧吉野川（上板より鳴門へ注ぐ）が本流であったが、明治一七年吉野川流域を、政府の依頼で調査したオランダのヨハネス・デレーケが、当時の吉野川を「古川」と名づけるのが適当であり、当時の別宮川（第十より徳島へ注ぐ、現在の川）を吉野川本流とするのが正しいと指導したのです。昭和三年に吉野川橋が完成したときから、別宮川は、吉野川と呼ばれるようになりました。

7、江川の沿革

江川は、遊園地の西方の吉野川堤下から、伏流水を集めて流れ、石井町の西覚円まで注ぐ、延長八・八キロの細い流れの川です。

明治のころまで、吉野川の本流であったことは、古い堤防の一部が各所で現われているのでわかります。

この堤防は、明治五年にはじまり、明治八年に完成したものです。川島の城山から藍畑に至る巨大な連続堤でした。明治三十二年の大洪水では、この境が切れ、再び本流となって帆船が通っていたそうです。明治四十四年着工した国の吉野川堤の第一期改修工事により、遊園地西方一帯の渚を埋めて築堤し、北流させることによって、完全に分離できたのです。しかし、昭和二十年の洪水では、この堤防も決壊し、洪水は石井町まで達したといわれています。吉野川が「四国三郎」と呼ばれた理由を再現したのは、記憶に新しいことなのです。



江 川

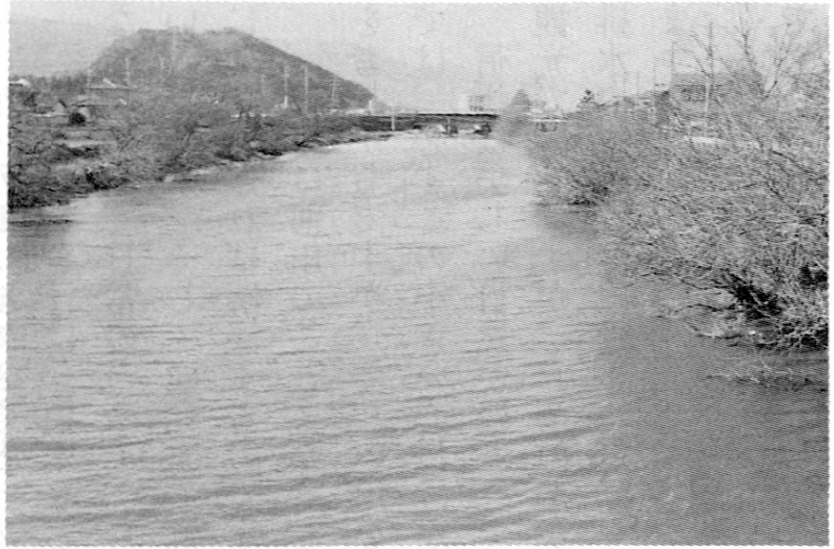
8、天然記念物「水温異常現象」

江川の水は、本年名水百選のひとつに選ばれました。（昔は日本第二の名水といわれていました）また、水温異常現象という天然記念物があります。冬にはほのかな湯気さえたつて、魚類が活気づき、スイレンの花が咲きます。夏には水温が一〇℃以下になり、魚はひそみ、スイレンは枯れて気泡が出なくなるといわれていました。

吉野川の伏流水が、冬には秋の暖かい砂礫層をとるので水も暖かく、夏は春の冷たい川水で冷やさされた土層をとるので冷たくなるというのが通説です。私の家では地下水を使っていますので、夏は洗たく機の水に手が入れられません。そして、冬は池のスイレンの花が咲きます。この理由を科学的に分折するため、近年多くの研究グループが調査していますが、一〇℃に及ぶ水温変化の理由は、まだまだ今後の研究に待たなければなりません。しかし、各種の原因で流れはよどみ、昔のような清い水流がないのは残念でなりません。

9、飯尾川の沿革

飯尾川の水源地は樋山地（標高二五〇メートル）です。もう一つの水源地は川島町の水神ノ滝付近からです。これが旧河道ですが、上流は一部麻名用水路として利用されています。鮎喰川との合流点まで延長二六・四キロはくねりが多く、川幅は最大六九メートルもあります。しかも平野の中流部にあるの



飯 尾 川

でスケールの大きい氾濫はんらんとなります。従って、改修工事は遅れ、下流部が改修されても、上・中流部は大雨ごとに洪水の被害をうけてきました。改修しないかぎり洪水はさげられないのですが、いざとなると上流・下流住民の対立がはなはだしく、政治の難問題となりつづけています。昭和二十九年の台風では三五〇ヘクタールが十五時間も浸水しました。その後も年中行事のように水害をうけていますが、昭和三十四年からやつと石井町の高原の関から排水路に着工し、宿願が達せられようとしています。

10、〃とりもどそう

美しいふるさとの川を〃

私たちは、一日一人平均約三〇〇ℓの水を使い、その七〇%を汚し、生活排水として流しているそうです。一人の量はほんのわずかですが、住宅化がすすんだ地域で川に集まる汚水はたいへんな量となります。その汚れた川の水で、私たちは農作物を栽培し、水道の水に利用しているのです。

螢ほたるやタニシが見られた美しい川を思い起こして下さい。これらの小さい生物が住めない川となって、人間に影響がないという保証はありません。

江川や飯尾川についていえば、生活排水が汚れの原因です。いくら法的に規制を受けないからと、私

たちには責任はないのでしょうか。お役所の責任な
のでしょうか。

環境庁の指導によれば、次のようです。

一、無リンの石鹼・洗剤を使用する。
一、流しに細い目の網などを取付け、たまったもの
をゴミとして、花壇の土に埋める。

一、油・残飯は紙でふきとってから洗う。

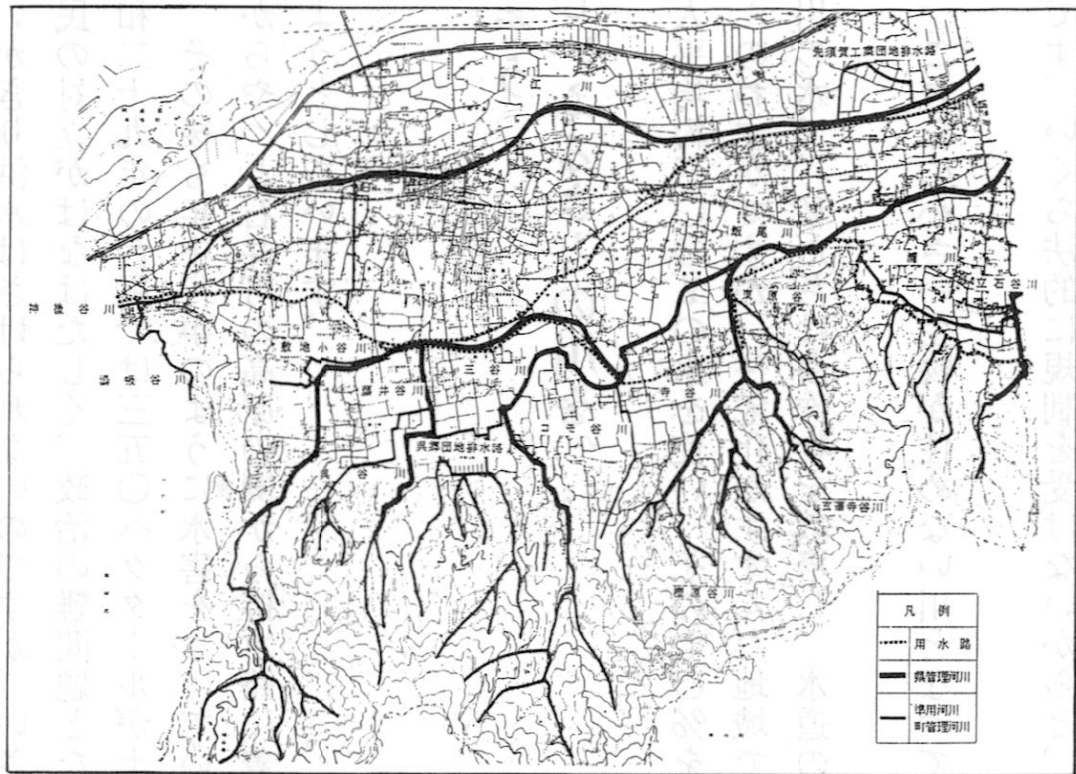
一、お米のとき汁は、植木などに利用する。

など、すべて日常の台所で、ちよつと気づかえば良
いことです。そして浄化する意識をもち、市民運動
に展開できれば解決するのです。

一般には河川のこととなると、莫大な経費と時間
を考えがちですが、美しい川を保全している先進地
では、必ずこの小さい心掛けが守られているのです。

信州は美しい自然が残されています。穂高は登山
観光で有名ですが、お金のかからない方法で、生活
排水やし尿処理施設をいち早く完備した街でもあり
ます。

私たちは美しい自然にあこがれても、それを守っている住民の英知と努力には目を向けられないもの
です。



現在の河川図

※ 本章参考文献（学習教科書）「吉野川」

第二章 江川物語

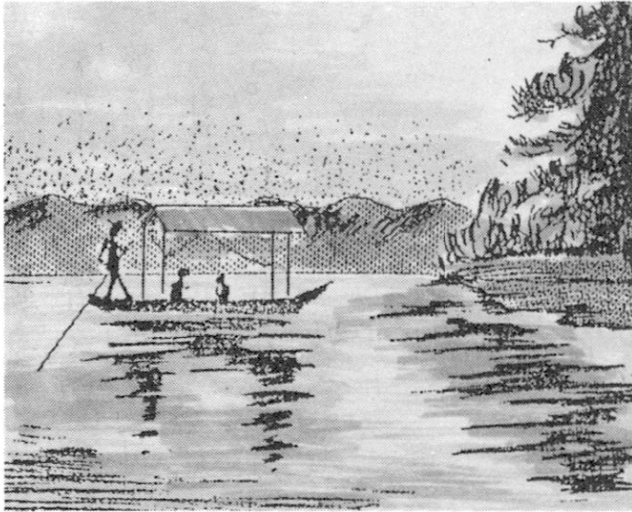
第一節 江 川

1、絵のような夏の江川

身も心も溶けるような夏の日でも、江川のたもとに足を運べば、何人も蘇まがえったような冷気にうたれる。どこまでも澄きった水、鮮かな青葉の影、ゆかしい涼みの舟、いづれも百パーセントの涼味をそそいでいる。

頭をめぐらせば、絵のよ
うな水車小屋の横から、一
群の家鴨あひるが泳いで出る、ま
るで絵のようだ。この静け
さを破るオールの響に、家
鴨あひるの群は時々方向をかえて
進んでいく。

やがて夜の幕まきと共に、こ
の静けさがとざされたかと



夏の江川



江 川

思ふと、涼風に舞う螢の光遊丸の灯が、鏡のような水の面を照して、納涼の気分をそそっている。

やがて、三々五々涼を求めて、たもとに集い、うちわ片手に橋の上にたたずむ人もあれば、我を忘れて螢に戯れる者もある。向う岸からは、詩吟の声や涼しい工場歌のリズムが聞こえてくる。屋方船の中からもれ出る尺八やハーモニカの音には、ボートをこぐ人も螢遊丸を操る人も、手をとめて耳をそばだてる。かくして町人は一日の労苦を忘れるのである。

町人の 暑きを流す 江川かな

「鴨島読本」著者不明より

2、江川の前身、南吉野川の昔

日 野 喜久雄

明治末期頃までの吉野川は、知恵島をはさんで南北に分かれ、南の流れを、鴨島の人々は北川とよんでいた。北川の分水箇所には低い石積の堰があつて、お堰とよんでいた。

これは北川の水流をおさえて、鴨島方面への水害を少なくするためつくられたものである。このお堰に堰堤が築かれ、今の江川ができた。

江川が北川だった当時は、漁業、洗濯、遊び場、舟便の場として使われ、特に夏には螢狩、水泳、風揚げの場として利用された。年末には、河原に茂った柳は、正月の棚飾用の枝として使われ、町の人々はとりにいった。その頃は、正月の棚飾の枝には柳を使い、松枝を使う家はまれであった。

北川の北岸は土地が高いので、低い堤防が築かれ、南岸は外が低く、人家も多いので、高くて強固な

堤防が築かれていた。この間の北川の流れは、今の江川の流れの筋を本流としていたが、川中も広く、深さもあり、水量も豊かで、今の江川とは比較にならない。

北川を南北に渡る橋は、今の鴨島公園東入口の北にあつて、大石を点々と置き、石を伝つて通る橋であつた。大雨がふると南北の交通は絶えた。川を越して南北へいつていた人は、水が増して帰れないことがよくあつた。

南岸寄りには、堤防の内側に竹林が続き、その内側には深い淵があつた。今の第二踏切より北へ出た所の淵は「大波止」、その東に水温の高い「たいわん」があり、その東に「かくい裏」という淵があつた。

(1) 江川は絶好の釣場・泳ぎ場・洗濯場

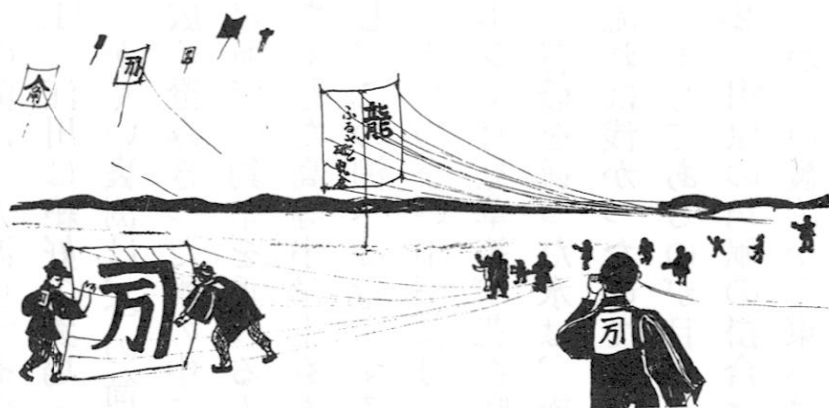
かくい裏淵は、今の筒井製糸工場の北にあつて、本流の流れを入れ、三〜五メートルの深さで、川幅も広く澄みきつた水の中に、二十センチもあるイナが泳いでいるのがよく見えた。この淵は魚釣りによい場所で、釣糸を垂れる人が絶えなかつた。中には魚をとろうとしてダイナマイトを投げ、誤つて片手をなくした高等小学生もあつた。また、ここは夏の水泳の本場で、大人も子供も多勢泳ぎにいった。しかし、この淵へは投身する人もあつて、何だか気味の悪い所でもあつた。

流れのない中洲には、石ころの河原が広がり、ところどころに柳の大木小木が生え、その間にオミナエシや月見草等が花を咲かせていた。

石橋を通つた水は、南東へ流れ、水車は米や麦を搗いていた。この流れは、かくい裏淵へ流れ込むが、流れは浅かつたので、夏には蚕具や衣類を洗濯にくる人が多く、流れの一带に蚕筵や蚕箱、棚竿、衣類を干してあるのが目立つた。

(2) 川原の角舳の掛合は風物詩

かくい裏淵から東へは、南岸寄りに川が流れ、その北は広い川原になっていた。この川原で夏は角舳の



掛合かけあひが盛んに行われた。

凧は障子紙二十枚張から百枚張位まであって、竹骨でつくり、表面には屋号、家紋、文字、絵が色とりどりにきれいに勇ましく描かれていた。

凧の掛合は、凧糸を掛合わせて、凧のおとし合いをする。二人で一組となり、一人は凧糸を操って凧をおとさないように糸をたくったり、のぼしたりする。一人は糸を入れた竹籠を持ち、糸をだしたり入れたりしながら前方へ走り、必死の勢で勇ましく相手の凧をおとそうと斗った。時には、凧の掛合から喧嘩になり、相手を組敷いて、石でなぐる場面も見えて恐ろしかったことがある。

凧の掛合の時は、子供も手製の小凧をもってきて揚げ、凧が空一杯になっていた。

(3) 北川の洪水の流路

大雨がふって北川に洪水がでた時は、川いっぱい濁流がとうとうと、さか波を立てて流れ、堤防にいてもくずれるか、恐ろしい思いがした。時には、人を家にすがつたまま、中流を流されて行くのがあったが、川中の柳の大木に当たって、家がこわされはしないかと、心配するだけであった。

洪水の時には、上流から多くの流木が川岸へ流れつくので、近くの人は、トビグチやクワをもって、流木をひきあげ、薪にしたり、材木は保管しておいて、後日、持主がさがしにくると、渡したりした。

洪水の時は、堤防下から噴きでる水と地上水が、南部の低地に集まり、川となって東流し、呉島の地鎮坂、駐在所、松浦邸の北側より、本郷の戸田邸の南、中西スーパの北を流れた。また、美摩病院南

辺より分流して東流し、阿部病院の北、鴨島墓地の南を流れて協同病院北裏に、いぢ川の淵をつくり、更に、役場前を流れて中島に流れ込んだ。

また、徳バス営業所の西側より分流して、上下島庚申塚の東を南に流れ、三味墓地の西側低地を流れ、飯尾川に流入した。

(4) 「おちらし」は、洪水時の常備食

北川が氾濫すると、飲料水や薪にも困り、炊事ができなくなる。大雨が二、三日続くと、家々では大麦を炒って、挽臼でひき、おちらしをつくった。飲料水も貯え、浸水の時でも食事に困らないように準備した。

鴨島辺の農家は、麦飯をたべていたので、おちらしは一般に好んでたべられた。それで雨の時、農耕ができないので、この時を利用しておちらしを挽く風は一般にあった。浸水しやすい農家の人々は、特におちらしをひいて、浸水時に備えたものである。

北川の堤防が決壊することは、たびたびあったようである。決壊すると、濁流は西麻植・上下島の低地を主流として、一面の大川となり、時には家を流したりした。

明治の初期、呉島の岡田様の家は、人が家にのったまま流され、これを見た人は、

「よいやはん、ごきげんよくいってきなはれ」と、いっただけで、何ともするすがなかつたとの話をきいたことがある。

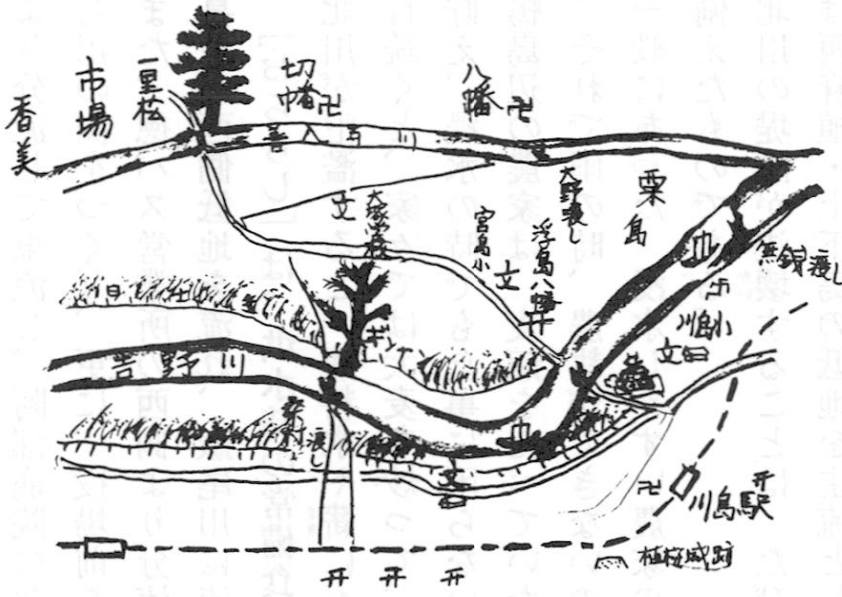
その時の洪水の深さは、麻植市の工藤邸、大北の武智邸、南新町の日野邸の



南吉野川氾濫水の流路

土蔵の基礎石の高さが一メートルもあるのを見ると想像がつく。明治末期頃より水害が頻繁であった善入寺島から、住民のたちのきが始まると共に、北川のお堰に堰が築かれ、北川は塞き止められ、吉野川の伏流水を流す江川ができた。このため鴨島方面は、吉野川の水害から免がれるようになった。

なお、北川のお堰に堰堤を築く時、基礎石として川島の城山の岩の鼻の岩をくだいて採ったり、善入寺島の人家や神社の基礎石を使ったりしたことである。



善入寺島略図

(5) 善入寺島の悲劇

善入寺島は、昔、鴨島町と地つづきであったが、承徳二年（一〇九八）の洪水で川中島となった。その当時は、栗島と呼ばれていたとおり、栗や藍作など農作物の豊庫でもあった。

明治になってから、善入寺という大きな寺があったから善入寺島と呼ばれるようになった。しかし、この島は洪水のたびに被害が大きく、明治三十年の洪水では、小学校女児童が五人も濁水にのまれたこともあって、同四十年の計画された吉野川の第一期改修工事に大問題となり、ついに、大正四年、約五〇〇戸、約三〇〇〇人は、強制退去命令がでて、無人島となった。

(6) 川原は自然の楽天地

筒井敏夫

鴨島駅の線路に沿って北西に堤防がありました。江川の増水による被害を防ぐもので、延々と西は今の吉野川遊園地までつづき、東は広大な河原で、その中央部に澄みきった清流が帯のように静かに流れ、堤防を越すと、北に細道がありました。

川原には、点々と柳が生え、雑草がところどころ生い繁り、江川も下流になると川幅が広くなって、帆かけ船が物資を運んでいました。今から考えると、ほんとうに夢のようです。

私が幼少の頃は、この広大な川原が楽天地で、誰の干渉も受けず、のびのびと自然に親しみ、水泳・魚とり・徒競走などが繰りひろげられました。遊び疲れて空腹を感じたとき、お互いに家路をたどる状態でした。したがって、知らず知らずのうちに体力も養われていました。学校の出席率も家事の都合によるほかは優秀で、当時は運動第一、学業は第二でした。

この川原で麻植郡の合同運動会が開催されたり、タコあげが盛んで、タコのかけあいがあったりしました。かけあいは先に地上に落ちた方が負けで、勝ったタコには竿のついたりっぱな旗が賞品としてもらえ、帰りには、この旗を先頭に音頭をとりながら、堂々と凱旋したのもうれしい思い出のひとつでした。

駅前には人力車がお客を待ち、当時の人気役者・曾我廼家五九郎さんが帰郷したときは、町長はじめ町議会議員が出迎えるなど、盛況で当時がしのばれる光景でした。

(7) 洪水時の恐ろしい思い

石田 徳一

私は、大正二年、十三歳のとき「ひょうたん屋」へ奉公に出ました。いまの店員であります。その時代は、鴨島の町は大小あわせて五十くらい製糸工場があり、たいへんなにぎわいを見せていました。

まだその頃は、江川の川幅も広がった。たしか大正九年とありますが、秋の台風があつて、堤防が欠壊する寸前までになりました。私も土手へのぼり状況を見にいきましたが、あまりのはげしさに、足もとが揺らぐ無気味さに襲われました。まるで、土手がうねっているようでした。

この台風の被害で、鴨島の八幡神社の西側にあつた朝日製糸の寄宿舎が倒壊し、工女さんが七、八名も若い生命を絶たれました。

(8) 肝を冷やした不思議な川

川真田 晋

明治四十年、私が六歳のとき、三倉一二さん、そのほか五人連れの子どもばかりで、吉野川を見にいくと相談がまとまり、北へ向かった。草や竹藪、せんだんの木、柳やむくの木など、見あげるような高い木の間を縫って、体の高さほどもある草をわけ、のぼったり、くだったりの道なき道を長い時間歩きたづづけ、やっと平地らしい芋畑に出てきました。今の善入寺島と思います。

北へ少しいって、川に出ました。そこは川原ではなく、石ひとつなく、草むらからすぐ池か淵のよう

な感じの川で、川幅も三十メートルくらいとせまく、深さもわかりません。ただ青々とした水が、目が回るようにうず巻いて流れていました。無気味でした。あたりをよく見わたしてみると、北向こうは八幡の伊月でした。おそろしくなって、誰いうとなく帰ろうといったときは、もう昼も過ぎていたのでしよう、腹がすいていたので、めいめい芋を掘って食べながら歩きました。家に近づくと、近所の人が大さわぎしているところへ、夕方の五時頃に帰りつきました。

3、江川かいわいの昔話

宮 崎 忠 雄

昭和五年頃までは、江川の南北両側に土手があり、北の知恵島側は、浦島・松岡宅前を、西へ吉野川堤防まで、東へ三軒屋・四ツ屋方面まで続いていました。南の土手は、鴨島一中前を西は江川遊園地、東は筒井製糸裏を抜けて、牛島地区まで連なっていました。そして、両土手に添って竹藪が連なっていました。土手の内側には水車が一軒だけあり、吉野川の大水ときは、お堰せき（遊園地西の吉野川堤防）が切れて、江川が増水し、水車が流されることがありました。水は三軒屋方面より入水し、知恵島方面も水害を受けたものです。

当時の家は、この水害から守るため、石を積み、地盤を高くして家を建ててあります。西知恵島（西麻植駅北側）方面より知恵島小学校へ通学していた生徒は、大雨になると、お堰が切れるから早く下校させておりました。

南へ渡れば、東側に「ドンガン池」と呼ばれる小さな池があり、その池には誰も入ることがありませんでした。池にはドンガン（スッポン）がいて、かみつかれば、朝日の昇るまで離してくれないといわれ、みんなおびえていた池でした。池の横には、南西へ「馬越」という細い道があり、両側はメヤブヤナギが生い繁り、昼間でも薄暗いので、馬でさえ、タヌキにおびえて通らなかつたそうで、馬も越さな
いが、いつしか訛なまって馬越の名がつけられたといわれます。

小学生の頃、学校から帰り、買い物のため鴨島へ行き、夕方になっての帰り道は、生い繁る竹藪と土手を越し、細い石橋を渡るときなど底冷えするただ中、川面にうっすらと靄かすみがかかり、にぶいせせらぎの音が聞こえ、子ども心にも、いっそうの寂しさを感じさせられました。

しかし、江川の水の清らかさは格別で、冬は暖かく夏は冷たく、魚もたくさん泳いでおり、ウナギ・カニ・エビ・ジャコ・フナ・イダなど魚類も豊富で、昼間は釣りをする人々にぎわっていました。夜になると、火河といって、瓶に石油を入れ、布の灯心に火をつけた灯りで魚を寄せ、玉網ですくいあげたものです。

夏季には、ホタルが無数に飛び交い、風物詩をかもしだし、光遊丸という屋形船やボートが浮かび、ホタル狩りにぎわいをみせていました。

昭和六年頃から、南北の堤防や川原の埋め立て工事がはじまり、江川のほとりに家も建てられるようになりました。今残されているのは、北側の土手に建っていた青石の灯籠（煌輝）が新橋の南河畔に残されている。それより南へ五十メートルほどのところは、クス・クヌギ・マツなどの雑木林でしたが、現在一本のクスが、それぞれ当時の面影を、わずかにしのばせています。

4、水車小屋の思い出

和田 芳

きくや菓子店の御主人篠原嘉之太さんにお聞きしてまいりました。

篠原さんのところは現在では生菓子専門店であり、菊づくりの名人としても知られていますが、先代様は江川のとりにて水車をなさっておりました。

「私の生家は、江川で水車（製粉所）をしていました。深見製材所のかみて、現在は野菜業の手塚さんのところでした。当時はきれいな水が流れていました。炊事もその水を使っていました。また、家鴨も飼っていて、江川の家鴨として、皆さんに楽しんでもらえました。

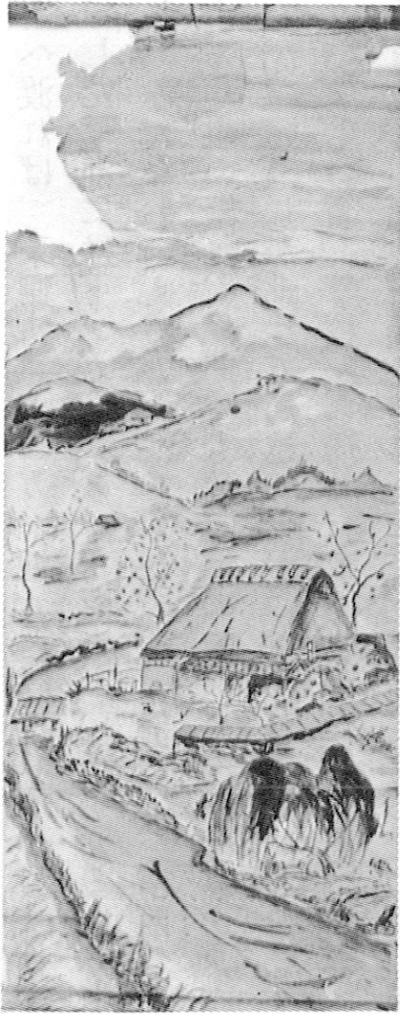
江川に家鴨が浮んでいる風景がなつかしく思い出されます。

水車の臼は七台から八台ありました。鴨島を中心に、知恵島、牛島からもふみにきてくれましたが、お得意先は、筒井製糸、片倉製糸の食糧を請けていました。主として、米・麦をふみましたが、水車で

ふんだものは格別においしいといってもらい、評判がよかったことを覚えています。

私の親父は偏屈でしたが、仕事は熱心で正直者だったので繁昌していました。

明治四十年頃にはじめてと記憶していますが、この商売はうまくいっていました。



水車小屋の絵

その後、機械ぶみの小山製米（東本町の坂本紙店の付近の北）と、鹿島屋の味噌屋さんにも製米所をはじめましたが、水車でふんだのがおおいと、遠方の人も馬車や荷車で運んできてくれました。そうです、値段の方はおぼえていません。大福帳が書いてありましたが、今は粉失してしまいました。

私が小学三年生の頃に、父は水車の仕事をやめました。そのわけは、洪水のたびに水車が流されて困ったからです。しかし、昔の人は親切に、いたんだ水車を届けてくれたり、「アクタ」の上に出水のひくのをまっている家鴨を届けてくれる人もありました。そりゃ、製米代を支払ってくれない人や、水車小屋へ盗人がはいつて、置いてある代金をたびたびとられたこともありました。仕事の終わるのをまっいてしのびこまれたのです。

親父は工藤茂平さんという人に権利をゆずりましたが、工藤さんは、長くはしなかったようで、水車はなくなりました。中西地区の岡田さんのお宅に、水車を絵いた巻物があるとお聞きしました。一度見せていただきたいと思っています。親父は川真田弥三郎と申します。」

5、変貌した江川

浦 島 武 一

新橋の下流の町道ならびに石橋は、明治時代から鴨島町と柿島村知恵島（現在は鴨島町に併合）を結ぶ重要な道路として建設されました。しかし、この道路は洪水でたびたび損害を受けておりました。それがために山石でつくり、今もその形が残っています。橋のところの水深は深く、人が立てないほどで

ありました。石橋を建設する費用は多額を要しましたが、すべて寄付金でまかなわれました。北岸の取り合い道路だけは、大昔からあり、岸には舟着場があつて、徳島港から運ばれてくる物資の荷揚げ場になっており、ニシン・魚・肥料などが荷揚げされ、ムシロ俵が積みあげられていました。この俵の重さは一俵で二十貫（七十五キロ）以上あり、昔の人の力の強さは相当なものだったことが想像されます。

このところを「浜」と呼んでいましたので、取り合い道路付近の道を、現在でも「浜道」といっています。南北一帯は浅瀬が広く、夏は子どももの天国で、水泳に、また水遊び、魚とり、シジミとりなどで毎日を楽しく過ごしたものでした。

西南部、現在の公民館・体育館付近の敷地は、全部小石の川原でありました。当時、鴨島は養蚕業では全国有数であり、その蚕具の洗滌を江川の流で行い、この広い川原で乾していたのです。

町道ができる以前は、その下流が入江になって浅瀬で、木板を五枚並べた橋があり、出水のときは、持ちあげて流れないようにしてあり、荷物は荷車で浅瀬を渡したのです。しかし、空車であっても、一人では動かすことのできない難所でした。

大洪水になると交通は途絶え、水が引くと、渡し舟で鴨島町へ買い物に出かけました。そのときには、八百蔵さんという人が船頭をつとめてくれました。そのかわり、年に一度はお世話になった人が、心ばかりのお礼をしたものです。このことをシヨマイといっております。八百蔵さんは温和な親切な人で



江川の灯籠

あり、みんなから、ほめられていました。

その後、町道が建設されましたが、さみしい場所でした。夜になると、方角が判明しにくいので、北の堤防の上に、常夜灯を建立して、毎夜火をともし、夜間の通行に便宜をはかりました。その灯籠は、体育館の入口の東の公園に移し、今も残されています。

6、江川 今昔

その一

松 島 正 二

私の家に次のような辞令がある。

「辛未六月 西民政掛の水利御普請方刺に付、勤中带刀指免の事、明治十一年六月七日付高知県の阿波郡知恵島江川堰修繕二付、当分第三課中土木係雇を申付候事、但し日給二十銭支給の事」

今はヘドロ化した見る影もない江川。一時は吉野川の本流であったが、遊園地西で北流させたことにより支流となり、現在の姿になった。江川は本町にとっては母なる川であった。

洪水出水のたびに、本町一帯に沃土を運び、農産物増産の資となり、舟運と共にこの地方に大なる働きをした。藩政時代には、特産の藍作、その後の養蚕・製糸の町とした。本町のところどころに残る白壁作りの寝床は、その名残りである。

当時覚円より吉野川に流入した江川。

藍作の肥料を舟で運び、流通の大動脈であった江川。廃堤前の堤防ぞいに波止（ハト）といつて、水

泳飛込みに使った石積があった。ここは荷揚場の跡である。

藍作騒動題材の鳴門秘帖の一節に、青柳付近に上陸、神後を経て川島郷に潜入したとある。当時、水量も多く舟運もあったであろうが、陸路の整備と、明治初年の江川堰の改修補修で、江川の使命は終わった。江川堰完成後も、吉野川出水洪水時には、江川河道には濁流が、今の新橋北岸より南の堤防までの間、奔流していたのを記憶している。

洪水は、吉野川改修工事完成時まで続いたので、私も五、六歳当時、父につれられ出水を見に行った。

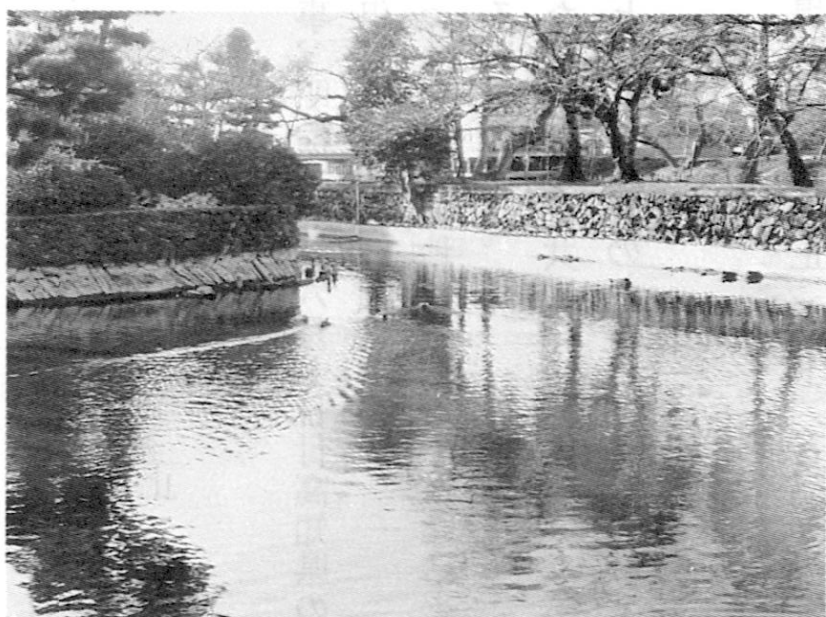
堤防ぞいの竹藪の間より、「先生、死亡した川魚とりの、川端辰蔵さんが、流木を拾っている」と、父に教えられたのを記憶している。

当時は、水車小屋があり、太いロープで堤防に引きつけてあり、水車の杵などを堤防に揚げてあった……。

藍作に変わり、養蚕が起こり、吉野川改修工事の完成により、江川出水の心配はなくなった。鉄道交通機関の発達と共に、本町に製糸業が発達したのも豊富な伏流水によるものと考えられる。

本町の発展と共に、廃堤、埋立と河川敷は、昭和初期には農地化し、戦後の急速な宅地化で、往時の清冽な川、豊かな水流の江川の姿は見る影もなくなった。

北岸より吉野川を渡船で渡った人が、夏の日の汗をふきながら、よくこの水を飲んでいたこと、夏の夜、川辺に立てば冷気を感じ、寄網で今の公園の鯉池で川魚をとったこと、そして螢狩の名所としても



鴨島公園

にぎわった昔の江川。

少年期を江川周辺で育った者には、すべてがなつかしい思い出である。今にして、現在の荒廃した姿は、誠に淋しい限りである。

江川は、今は昔、母なる川でなかったか。

7、江川浚渫工事とその意味

浦 島 武 一

江川は、元は吉野川の本流であり、毎年の洪水で、下流一帯は水害に見舞われ、大被害を受けていました。それが為、上流の知恵島けん崎より、南西知恵島の堤防の区間に、長い堰堤を二段に造り、水を堰止めたのである。これを十三ヶ村堰と呼んでいた。(今も地名をお堰せきと言う) 工事に使用した石は、川島の岩の鼻の岩を切り取り使った。

吉野川の増水位が、一丈以上の場合には堰堤を越え、江川に流れ落ち見事な水勢であった。それでも明治四十五年の大洪水には、住家と共に人が流れたこともある。そ



鴨島公園

の当時、知恵島全域は、その都度浸水し、多大の被害を受けていた。

この事があって、吉野川に改修工事が行われ、堰堤の上に、今の大堤防が出来たので、水害がなくなり、下流一帯は雄大な平野が出現したのである。

現在の江川に沿って、南北の東西に走る道路は、旧堤防の敷地であり、この堤内には一軒の家もなく、川原と柳の木が多く繁り、別天地であった。清流は鏡の如く、川底の小石まで群明に見えていた。

この清流は、他に類がなく、天然記念物としても有名で、夏は冷たく、冬は温かくて水蒸気が立ちのぼり、川の上は先方が見えないほど見事であった。また螢の名所としても県下一と言われていた。

川には遊覧船の螢友丸が五隻も浮かび、夏の夜は、涼を求めて人出が多く、有名な鴨島小唄が歌われたのである。

この別天地を求めて民家が建ち並び、公共施設や町立の各学校が生まれ、川原は発展をしたが、ただ、江川だけが取り残され、大堤防で堰止めて以来、六十年間も放置された。ヘドロが三尺もたまり、湧水もとまり、清流もどぶ川となり、魚も住まず、魚影もなく、夏は悪臭がただよい、各般に大影響を与え、保健衛生上問題となっていた。やむなく関係住民六百五十戸が連署にて、県当局に陳情いたした所、三木知事は快く承知下さり、ご高配を賜わり、はじめてヘドロの浚渫しゅんせつ工事が本年（昭和五十八年）二月より施工された。浚渫の結果、湧水は地下水であり、元の如く澄みきった水が流れることも判明した。しかも、吉野川水系の南岸地帯の水源でもあり、関係住民は、大いに喜び協力して、元の清流を取り戻そうと意を強くしたのである。

浚渫の土砂は、両岸の補強工事に使用し、中四メートルの遊歩道として生まれ変わり、これに答えて、桜千本を植樹し、公園と共に行楽地として、鴨島のシンボルとして保存するように記念碑を建立したのである。

8、今昔の感深し、いぢ川周辺

日野 喜久雄

(1) いぢ川の思い出

現在、麻植協同病院があるところは万の邸内であるが、天正の昔には鴨島六之進が壘を構えていたところである。その北下に、いぢ川といわれる長さ東西に百五十メートル、幅二十メートルくらいの渚があった。

大雨や洪水のときのほかは、水が流れず、平常は水がよどんで水草や浮流物がいっしょになって塊になり、水面上に島のようにあちこちに浮かんでいた。晴天の日には、その塊の上に亀が乗って甲羅干しをしているのをよく見かけた。

大雨が降ったり、吉野川に洪水が出て堤防の下から水が噴きあげたり、氾濫で水が堤防からあふれたりしたとき、水は低い南部へ流れ、上下島の北部に集まり、低地づたいに東や南にむけて落ちた。その流れの一部が今の美摩病院の南からつづいている



現在のいぢ川

低地を流れて、いぢ川を通って東へ落ちた。

この辺の土地を掘ると、砂の層と粘土の層が何段にも重なっている。これは、あるときは川が砂を運び、あるときは泥が沈澱したためと思われる。

鴨島六之進が壘を築いたとき、ここの土を南に上げて壘を高くし、一方の掘った跡を堀として、裏側の防備にしたのかも知れない。それに水が流れ込んで土を流し、次第に深くなって、いぢ川の涸になつたとも考えられる。いぢ川には、平常でも地下水の湧出や町の下水の流入があつて、水をたたえていた。

(2) いぢ川畑の芝居小屋

いぢ川の上手、南北道路の西側には広い畑があつて、ここは大正の末頃まで、たびたび野立ての小屋が建てられて、歌舞伎や浄瑠璃の人形芝居、足芸、相撲などの興行が催された。興行がくると、寄せ太鼓を鳴らして人々に知らせた。町内に娯楽の常設がなかった当時としては、毎日仕事に明け暮れて娯楽を求めている人々や好奇心の盛んな子どもたちは、太鼓の音に心おどらせ、大勢見物に集まったものである。

いぢ川のあたりは、昔は南に^{かまゑ}万の土塀が接岸ように高く立ち、その西に竹藪や木が茂っており、北岸（藤川病院筋）は柳がところどころに生え、その外側に細道があつたが、近くに人家はなく、また水は汚水のように深さは底知れずといわれ、泳ぐ人や釣りをする人はなかつた。ときには、犬猫の死体や汚物を棄てたりもしたので、昼でも薄気味悪く、夜はなおさら寄りつく人はなかつた。

(3) 本郷の庚申塔

いぢ川尻にも人家はなく、さびしい上に、明治の中頃に殺人事件が発生するなど、恐いところとされていた。このためか、今の本郷の庚申塔が建てられ、もろもろの供養をすると共に、通行人に心のやすらぎを与えた。この庚申塔は、向麻山の庚申祠の分家といわれ、今では願いごとを成就するご利益が多

いとして、参拝者が多く線香の煙が絶えない。

いぢ川のさびしく、恐ろしい昔を思い、今の舗装道路に商店が立ちならんで、交通の絶え間のないありさまを見ると、今昔の感にたえないのは私一人であらうか。

第二節 飯尾川

1、飯尾川の流路

大正末期頃までの飯尾川は、鴨島の人々からは「前川」とよばれていた。

水源地は敷地の奥より発し、敷島神社の鳥居前を北流して大東南より東流し、今の変電所北を流れ、「かく大」裏で深くなり、この辺で、麻名用水を南北に分ける「馬淵」の水門より、漏れる水を加え水量を増した。ここはよい釣り場であった。

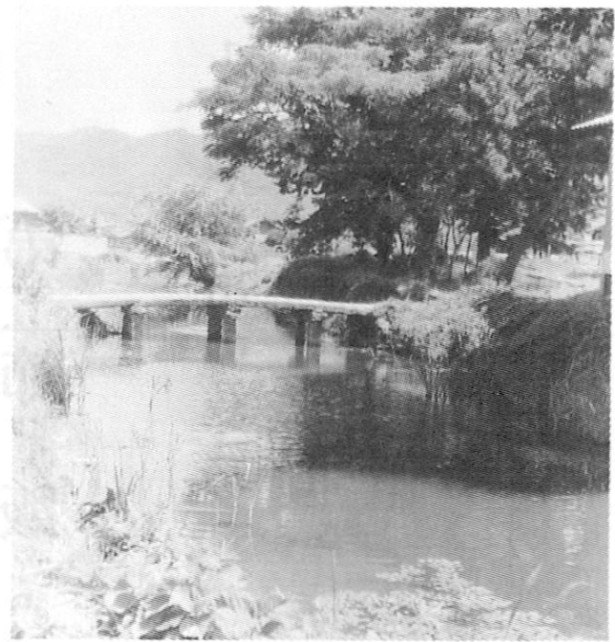
日 野 喜久雄



本郷の庚申塔



舟だんじり



飯尾川 (諏訪神社付近)

かく大裏の北岸に「避病舎」があった。その昔、飯尾方面には赤痢病が統発し、避病舎はたびたび満員だった。この辺を「赤小屋」といわれ、夜には赤ん坊の泣き声が聞こえる恐ろしい所であった。かく大裏より百五十メートルくだると小さな石橋がかかっている。古来から、敷地飯尾より鴨島方面へ通ずる大事な橋で、今も残っている。

石橋より二百メートルくだると、唐人橋がかかっており、これも石橋で、飯尾より鴨島方面へ通ずる重要な橋で、今も残っている。

唐人橋より三百メートルくだると、大石を点々とおいた跳び橋があった。それから二百メートルくだると「金元」裏となる。ここは広くて深くよい釣り場であった。よく「でだて漁」が行われた。でだて漁は、川一面に生えた葦や藻草、稜、くわい等の水草を川の上と下とに集めて、魚のにげ道をふさぎ、大勢の人が川に入り、胸まで水につかりながら、底の沼をふんで水をにごし、魚を窒息させて浮きあがらせ、手で掴んだり、手網ですくいとったりする。にぎやかな漁法で、はえ・ざこ・ふな・なまず・うなぎなどが沢山とれた。

金元裏をくだると高橋がかかっている。この橋は明治末頃、徳島の蔭山氏が経営していた持部鉾山から、三谷までワイヤ

ーロープでおろしてきた銅鉾を、鴨島駅まで運ぶ牛車や馬車の通り道として、飯尾川にかけられた。

世に知られた高く長い木橋である。この橋は森藤方面より鴨島へ通ずる重要な橋である。高いので洪水の時には浸されず、交通上今でも重視されている。

高橋から四百メートルくだると「お諏訪淵」になる。ここの北岸上に諏訪神社が祀られ、神社の庭からお諏訪淵まで石段が造られていた。

お祭にはこの段の下に「船だんじり」が着けられ、打子がこの段をおりて船に乗り、太鼓を打ちながら、中島橋までの間を上下した。諏訪神社は今は三百メートル下に移築され、船だんじりはなくなり、神輿が置かれている。

お諏訪淵は広くて深く、釣りや投網によい漁場だった。

川は東流して中島橋をくぐる。昔の中島橋は、今の橋の南下に現存している石橋で、交通の要衝であった。中島橋を過ぎると、三谷川を入れて東流し、やがて北流して宮地橋をくぐる。この橋も低い所にかけられた石橋だった。

川は宮地橋をくぐると東流し、ひょうたん橋をくぐる。この橋の辺は竹藪や、大木が茂り、昼でも気味が悪く、狸が棲んでいて、夜は美人に化けて見る人を楽しませたが、夜が明けて行ってみると、そこに木の葉が落ちていたといわれた。

ひょうたん橋から二百メートルくだると十二騎橋がある。この橋は今は通る人もないが、昔はこの辺にも竹藪や樹木が茂って、狸が棲んでいた。夜には狸が十二の馬頭に化け、じゃんじゃん飛び回ったといわれている。

川は十二騎橋より東流を続け、向麻山の北下の竜神淵となる。この淵は最も広く、最も深く、竜神がひそんでいるといわれ、さびしくこわい感じさえする。釣りには一番よい所で、大きな鯉やなまず、ふ

なが釣れる。竜神淵の南上で麻名用水の水が流れおちる所は、洗岩という大岩で、昔は麻の皮を洗いさらした所として知られている。

竜神淵の下流から、川は北流して市瀬の大石橋をくぐる。前の市瀬橋は今の橋の南下にかかっている。鴨島から徳島へ通じる交通の要衝があったが、今はなく、牛島城の内の中野邸（旧岡田邸）の庭にかけてられている。

市瀬橋より少し北流して、次に東流して、深く広い市瀬となり、水量も豊で、年中よい釣り場である。

(2) 天羽医師と狸の恩返し

市瀬より東流した飯尾川は、牛島橋をくぐり、東流して石井町の浦庄に流入する。牛島橋は大正初期までは跳び石橋で、その付近は竹藪や樹木が茂り、狸が棲んでいた。この狸が病氣をして困っていた時、橋の東南にいた天羽修珉医師が、手当てをして治してやった。その狸が恩返しに、天羽医師に口中薬を教えてあげた。天羽医師はこの薬で多くの人の咽喉の病氣を治してあげたそうである。

飯尾川の支流には敷地川、天神谷川、三谷川などがあるが、天井川で、堤防があるが、平素は空谷からたにである。主流は低地を流れているので堤防がない。

大雨が降って、山北斜面の水が流下すると、谷の堤防を決壊し流域は氾濫源となった。田畑、人家に大きな被害を与えたのである。

水害は中島辺に多く、中島の井上邸の基礎石の高さを見れば、水かさの高かったことが分かる。洪水の激しい時は、飯尾川をはさむ南北の交通は、高橋を除く外は途絶えたのである。

(3) 川竹の用途は多かった

飯尾川の南岸には竹林が続いていた。

昔は竹の用途が多かった。釣用の釣竿、魚籠かご、養蚕用のえびら、蚕棚、農業用の篩、箕、穀竿、遊具

としての竹馬、竹とんぼ、竹鉄砲、弓矢、凧作りに用いられ、鳥籠とりかご、つつみ、めかご、こくばかき、扇子、うちわ、竹ぼうき作りにも用いられた。

七夕の短冊笹にも使われた。竹皮は食物包みや草履作り、雨笠作りにも用いられた。それで昔はよい竹材が作られたが、今は少なくなった。

(4) 飯尾川での漁法

飯尾川では魚がよくとれた。上流の麻名用水の水門からもれる清流には、じんぞくや、「ささどじょう」、「いっしゅう」がとれ、砂の所ではしじみがとれた。その他の所では、じゃこ、はえ、ふな、いっしゅう、うしぬ、ぎぎ、なまず……がとれ、沼のある所では、どじょう、うなぎ、田にし、どぶ貝、かにがとれた。その当時は、とった魚や貝は食用に供した。

魚のとり方にも色々あった。釣針に餌をつけて釣る餌釣りがあり、餌にはみみず、蜂の子、酒粕等が用いられた。つつみや唐篩、玉網ですくいとるもの、穴釣竿で積み石の間や穴にいる魚をおびき出して、金突きで刺してとる穴釣り、広く深い沼のある所では、水をこだててとるこだて漁、夜に魚が静止しているのをふせてとる夜ぶせ、夜延縄で釣る夜釣り、出水時につつまやとうしで、魚が逆上するのを受けて、すくいあげる魚受けもあった。川にせきを作り、一部に流れを通し、簀籠すいろうをすえて魚をとるなど、色々工夫して魚をとった。



飯 尾 川

飯尾川の初夏は、螢狩でにぎわった。川辺の上に合戦かと思われる程沢山の螢が飛び交い、草の中には、光を放つ幼虫があちこちにはっていた。

大人も子供も、ほうきや団扇をもって川辺へ行き、「ホー、ホー、ホタルこい」とよびながら、螢を追いかけてたり、おさえたりして、蚊帳張りの螢籠に入れて、螢の光を楽しんだものである。

(5) 鴨島と麻名用水

明治四十年五月一日、麻名用水が開通したが、鴨島は用水組合に加入していなかったため、用水路に水が豊かに流れていても水田は作れなかった。

昔から鴨島には水田に使える川や池がなかったため、麦が主作物で農家の人は麦飯ばかり食べていた。稲は飯尾川のほとりに、狭い土地をもつ人が、川の水を汲みこんで植えたりしていた。それでも田植を祝って、近所の子供に赤飯を饗応するほどであった。他の家では陸稲（おか穂）を栽培していたが、舌ざわりが悪く味もまずい米であった。

麻名用水は、明治三十九年頃掘り始め、川島の城山の西南部吉野川に接する所から、城山の下を北へトンネルを掘って水を流し、北の流れ口から東へ低地を通過して水路を掘り、水を流した。

昔から四国山脈の水は北に流れ、一方、北の吉野川は氾濫すると南に流れ、南からの水と北から流れる水の合う低地が麻名用水路である。川島から低地を通過して東へ流れた水は、西麻植大東の東にある馬淵の水門で二流に分けられている。南の流れは飯尾、山路から向麻山の北麓を通り、上浦から名西郡の浦庄、石井へ流れて、流域の水田を潤している。北の流れは、上下島、殿郷の南部を通り、中島、内原、牛島を流れて名西郡の南島高原に入り、流域を潤している。なお、馬淵の水門を開けば、水は飯尾川に流入している。この麻名用水施工の技師長を勤めたのは上下島の武智正次郎であった。正次郎は、明治三十七年京都帝国大学理工科土木学科を卒業した人である。

（第十八章参考）

この当時、トンネル工事には火薬を使ったが、水路を掘るのは人力にたより、土を掘ってはもっこに入れて、担ぎ上げて、堤防に積み上げたものである。また、橋脚は石を積みあげ橋桁は青石や花崗岩を使った。

麻名用水は、鴨島では水田作りに寄与することがなかったが、洗濯や魚取り、水泳にはよく使われた。用水路には各所に橋が架けられた。その橋の傍には大てい青石で三段に重ねた洗場が設けられていた。すべての水を井戸水にたよっていた。それまでと変わってこの水は、衣料品などの洗濯から養蚕具などの水洗いに使われ、洗場には人が絶えなかった。

用水では、魚取りもよく行われた。春から秋までは、飯粒や酒粕を餌にして、ハエやフナ、時には鮎を釣ったりした。夏には擬似針でハエを釣った。また、割竹を細くしたものの先に鰻針をとり付けて、穴釣り竿を作り、みみづを針につけ、橋脚の石積の間に潜んでいる鰻、蟹、うしぬを誘い出し、金突で突いて取る穴釣りもした。夜、十メートル位の紐に十本位の鰻針を取り付けて、早縄を作り、鰻や鯰を釣ったりした。また、洗場は水勢が緩かなので魚が集まっているのを玉網で掬いに行ったりした。

冬期は用水を止め、水が減るので水路へ入って、ハエ、フナ、ササドジョウ、などを掬い取ったり押えて取ったりした。

用水は水量豊かで幅もあり、深さも長さもあって、水泳には格好な場所であった。子供も大人もよく泳ぎに行ったものである。上下島辺の子供は男でも女でも泳げない者はなかった。幼児は洗場で泳ぎを習い、泳ぎを覚えると、橋から飛び込んで遠くまで泳いだり、潜水したり、水流と逆に泳いだりした。時には相手の頭を押えたり、足を引いたりして水中で喧嘩遊びをすることもあった。用水は水泳をして楽しい所であったが、深く水勢が早いので流水に足をとられて溺死する子供も時々あった。

用水組合では、泳ぐ者が土手を上がり下りして、くずすので水泳を禁止し、取締まり人が巡回してい

た。それでも子供は、取り締まり人が見えると、岸に上がって着物をもって逃げた。中には捕えられて叱られたり、逃げる時、着物を置き忘れて貰いに行つて叱られることもあった。

今は橋はコンクリートに替わり、岸もコンクリートで固められ、水泳禁止の札が立てられ、泳ぐ人は少ないが、昔を思えばなつかしい思い出が多い。

第三節 阿波中央橋

1、阿波中央橋の前身 “源太の渡し”

徳島平野を東西につらぬく吉野川は、昔から運輸交通の大動脈として、多大な役をしてくれましたが、渡し舟たぶねにたよる兩岸の交通は、この上もなく不便なものでした。明治十四年徳島県統計書によると、吉野川流域には一五二の渡し舟場がありました。南北に動こうとすれば、この方法しかなかったのです。

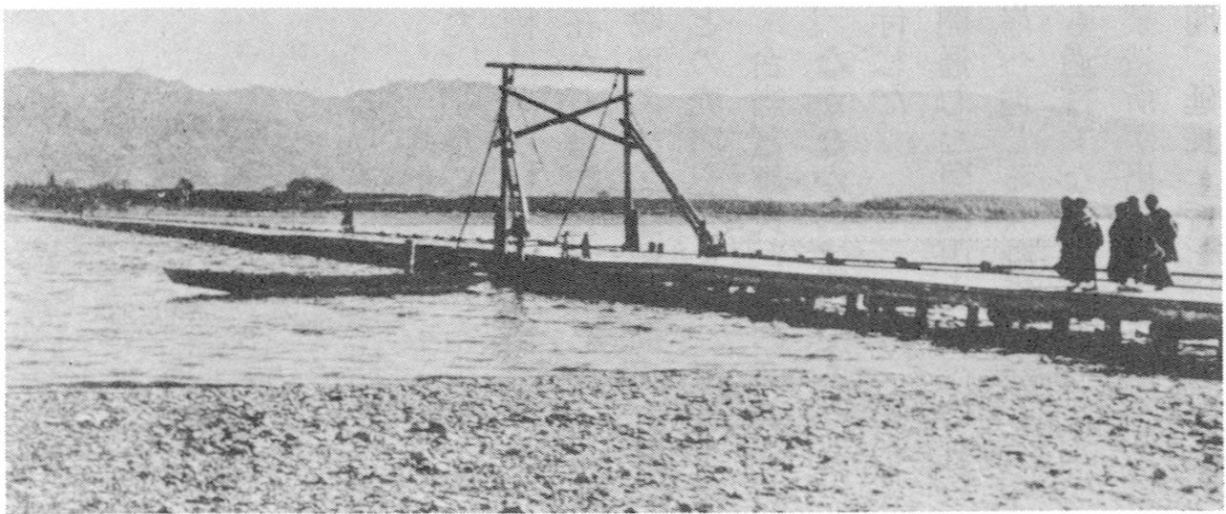
大正三年から陸上に自動車が始めて、交通事情が大きく変化しはじめ、大正末年から昭和四年までに、各所に大橋が完成しています。吉野川橋は、一〇七一メートルで、当時は東洋一といわれ、穴吹橋（昭和三年）四一六メートル、三好橋（昭和二年）は二四三・五メートルで、吉野川横断交通の幕

明けとなりました。

阿波中央橋については、残念ながら取り残されましたが、地元民の宿願として、政治家も情熱をかたむけたのです。そして「源太の渡し」と呼ばれていたところに、昭和二年、旧陸軍第十一大隊の演習で、木造潜水橋をかけたのでした。

それまでは、目の前に見える対岸へ物を運ぶには、吉野川橋か穴吹橋を渡らなければならなかった。兩岸の町村民はこの不便にたえかねて、昭和三年御大典記念に、鴨島町と柿島村が組合をつくり、工費約三万六千円を投じ、長さ三二七メートルの沈下橋を作ることによって、急場をしのごうにしたのです。

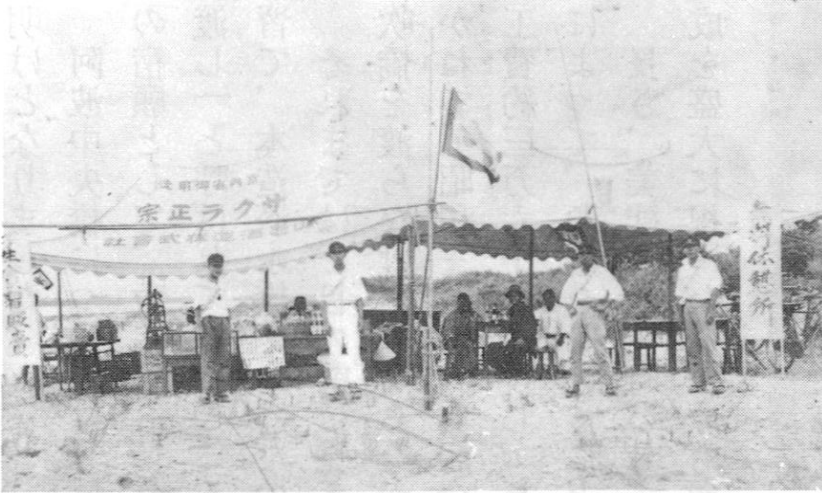
長さ、美観とも当時としては、壮大なものでした。町民あげて完成を盛大に祝った歌が今も残されています。



源太の渡し

2、「源太の渡し」架橋工事の思い出

竹内 捨次郎



昭和3年夏(?)善通寺師団工兵隊による吉野川
中央橋架橋工事中の売店風景

志摩政勝
台東富雄(故人)

竹内捨次郎
高木七郎(故人)

ときは昭和四年の暑い夏だった。工事に携わったのは、当時の善通寺師団工兵隊五十余人。橋は潜水橋(沈下橋)で、わずか十日間の突貫工事で完成。近在から見物人がつめかけたため、南岸の河原にテントを張り、古物商の故・鎌田要助氏の肝入りで、ラムネ、氷西瓜すいか、たばこなどの売店を営んだ。従事者は志摩政勝氏、故・高木七郎氏、故・台富雄氏と私の四名。開通祝いには、打ち上げ花火があり、なかなかの盛況であった。その売上げ利益を鴨島小学校へ寄付した。

この架橋が、昭和二十八年に開通した阿波中央橋へのきっかけであって、わが鴨島町から北岸へ通じる大動脈となり、今日の発展の基盤となったといっても過言でない。

なお、開通を祝って島勝蚕種製造所が出した「チラシ」には、当時・昭和三年八月、橋幅・式間、延長・百七拾参間とあり、

この歌詞を国境警備の節で歌うと注釈がついている。

吉野川中央橋開通記念之歌

一、ここは四国の三郎が

うぶ声あげて五十余里

流れ来たりし源太の瀬

二、南は名邑鴨島町

林と立てる煙突は

蚕都の気を吐き天を摩す

三、蚕種製造に製糸業

国家富源の開拓に

阿北物資の集散地

四、春の霧島 秋の菊

夏の螢に身をもやす

清客吞吐の花の町

また、ラツバ節で歌える祝賀の歌も同時に記されている。歌詞に出てくるシマカは島勝蚕種製造所で、自社名を織り込んである。

一、今度工兵隊の架橋演習

四国三郎の源太の瀬

炎天百度の夏の日

記念に架けたる沈下橋

五、この新興の鴨島に

なお幸あれと架せられし

きょう落成の中央橋

六、炎天百度の夏の日

義勇奉仕のますらおが

魂こめし沈下橋

七、時は御即位昭和夏

尽くせし君（工兵）のいさおしは

吉野の流れの尽くるまで

二、阿北の中心麻植阿波が

征きたい来たいの源太の瀬

今まで嫌うたわたしでも

中央橋のおかげで通われる

三、吉野川には数橋あれど

鴨島に通うは中央橋

今までわたしを嫌うたが

工兵隊のおかげで通われる

四、源太にかけたる中央橋

この清流に影やどす

南は蚕都鴨島町

名高い蚕種はシマカたね

五、道は左側こたねはシマカ

はしばし通るに気をつける

鴨島通いなら中央橋

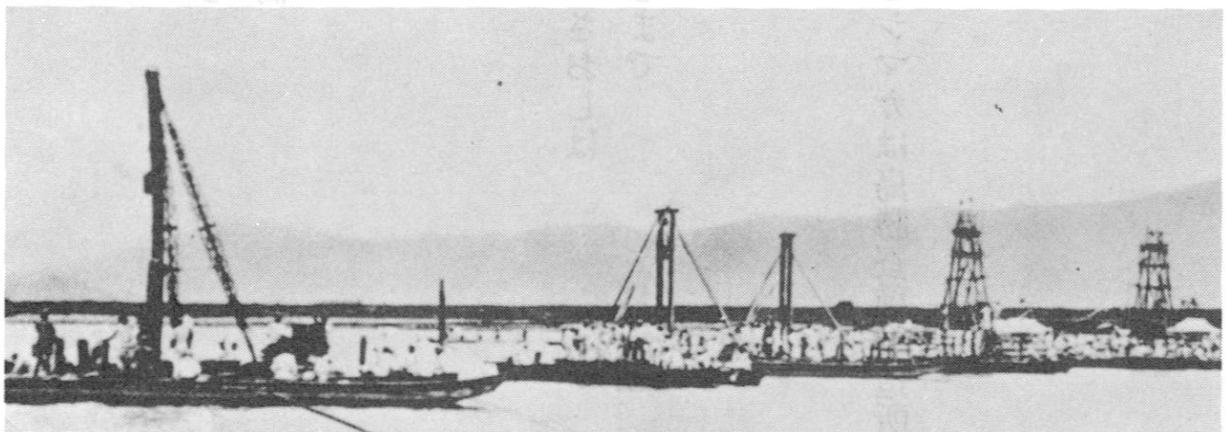
工兵隊の架けたる沈下橋

六、鴨島名物かずかずあげりや

一に菊人形霧島よ

吉野川中央橋

三に蚕都のシマカたね



源太の渡しの架橋工事

3、源太の渡し賃

坪 井 重太郎談

源太の渡しは、現在の中央橋の前身である。

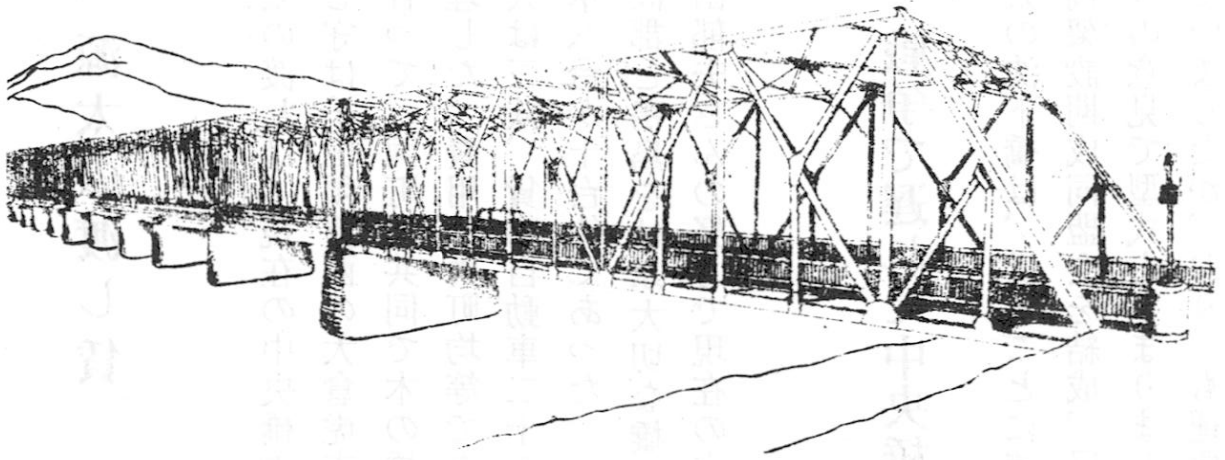
渡し守は千田須賀西の大倉虎市さんがしていた。昭和二年、花枳町長時代に柿原村長手塚治三郎氏と話し合って、両町が共同で木の橋を作った。しかし、吉野川の大水のために橋が流されたので、その都度修理した。費用は両町均等であった。最初の橋の通りぞめた人の名前は覚えていない。当時の渡し賃は、人は三銭、貨物自動車二十五銭、乗用車二十銭であったと思う。一日の利用者は約五百人、車五台、乗用車八台か十台位であった。

阿波郡と鴨島を結ぶ大切な橋なので、工兵隊の兵隊が架けてくれてありがたかった。終戦後、町長川真田郁夫さんの努力で現在の立派な橋となり昔の事がなつかしく思われる。

4、戦争で遅れた中央橋

源太の沈下橋は、洪水ごとに流失・大破がくりかえされていたが、昭和二十一年、川真田郁夫町長が、中央橋架設期成同盟会を結成、県でも議案を決議し、九大教授・三瀬幸三郎、早大教授・青木楠男工学博士等の意見で型式もきまりました。二十二年には建設省から八〇〇万円の予算が内示され、順調にすすんでいましたが、おりしも運悪く、日本は敗戦で物資不足の時代、鋼材さがしに奔走しなければなら

中央橋竣工図



なくなつて、同年六月、連合軍の指令で中止されるはめになりました。地元民の失望は大きいものでした。ところが二十三年の洪水で、みなおされ、災害復旧の機会に、県は根本的に橋をかけることになりました。

起工式をあげたのは、昭和二十五年四月二十五日で、約四年の工期を経て、二十九年のはじめ、吉野川橋につぐ長さ、八二〇・六メートルの大橋が完成しました。総工費二億六〇〇〇万円でした。「橋がかかる」と声をあげてから三十年の月日が流れていました。

5、町勢要覧(S24年)にみる中央橋のこと

吉野川は、徳島県北部を東西に貫流し、広大な吉野平野を形成し、その恩恵に預るは大なるものであるが、三好郡池田町より河口に至る約八五キロメートルの流路延長を有し、且つ洪水時は水位上昇し水勢激烈を極め、数個の木造假橋は流失し、渡船も一時通航不能となり、交通上不利不便を来すのみならず、南北岸の政治・文化の交流、引いては生産の増強に甚しい支障を与えている。

現在吉野川に架設せられている永久橋としての道路橋は、僅かに三好橋、穴吹橋、吉野川橋の三橋に過ぎず、相互に約四五キロの遠きに位置している。中央地帯に於ける交通は、それ等永久橋に迂回するか、或いは渡し舟、または災害時流失破損する木造潜水橋に依存せねばならぬ実状にある。

中央橋は既設永久橋の穴吹橋、吉野川橋の約中央に位置し、木造潜水橋にして、これがため阿波麻植両郡及び板野、名西両郡の一部の蒙る不利不便は甚しいものである。永久橋架設の要望は、既に三十年の古きに亘り、現在木橋は昭和三年工兵第十一大隊架橋演習により架設せられたのを濫觴とするものでその後、毎年の洪水にほとんど例外なく流失または大破しその都度国費または県費を以て災害復旧工事を実施していたものである。

たまたま昭和初年県に於て、十一大橋梁架設計画樹立せられるに際し、吉野川橋、穴吹橋、三好橋等と共に架設計画に加えられたるも諸事情により実現を見ず今日に至ったのであるが、終戦後再び架設要望が熾烈となり、期成同盟会が結成せられ、関係方面に猛運動を展開し、昭和二十二年国庫補助事業として一応計上せられたが中止となり、昭和二十三年災害復旧事業として潜水橋を査定せられたるを契機に再び本橋架設の糸口をつかみ、資材予算の獲得に努力し昭和二十四年国庫補助事業として認められ、これに県費及び地元負担金を加へ取合道路を含め総



阿波中央橋

事業費二億一千万円の継続事業として県議会に認められるに至った。

橋梁型式は三経間連続、分格間ワーレントラス橋として九大三瀬博士、早大青木博士、原口博士、鈴木博士、末松地建局長等斯界の権威者会同の上決定せられたもので、延長八二一メートル、有効巾員六メートル、取合道路二・五メートルであり、所要資材は鋼材二、〇〇〇トン、セメント二、一〇〇トン、木材五、八〇〇コクを要する戦後日本最大の橋梁である。

本橋完成の暁は、交通上至大の利便を与えるのみならず、出水に際しても支障なく、吉野川水防上の処置は万全を期し得られ、生産物の増送、増産、地方産業の開発は勿論関係二十一ヶ町村を始め県下の政治、文化また教育並に民生上貢献するところ非常に大なるものである。

第四節 ま と め

1、江川物語

松 島 正 二

鴨島町は西から東に或は分かれ、合流した幾筋もの低地があります。これは吉野川の氾濫による河跡

です。今は都市化のため埋め立てられて宅地化し、分断されていますが、部分的には旧の姿を残しております。

麻名用水も河跡を利用し開設されたものです。鴨島城跡、現代の麻植協同病院北側の道路は、いぢ川とよんで、池のようになっていたのを覚えております。

江川も、今は河跡として姿をとどめております。私の幼少時、この南岸の堤防が決壊したのを覚えています。普段は、さびしい所でした。

百五十年前までは水量も多く、現石井町覚円付近より、舟で物資を運んでいたのも、藩政時代、藍作りの肥料や藍玉を運んでいたと思います。

その荷揚場として、堤防のところどころに青石をつんだ跡が残っています。私達は「大波止」とよんでおり、水泳の飛びこみ場に利用したのを記憶しています。夏冷く冬暖く、清冽な川魚も多く、寄せ網、投網をしているのをよく見かけました。また江川一帯は螢の名所、遊園地開設から戦前までは、螢列車が運行されていました。夏の夜、私の家まで螢のとんできたことを覚えております。

今は川水汚染のため螢は姿を見られません。

戦前は夕暮になると、旧県道の石橋に立つと、汗が引く程冷気が漂よい、よく「源太渡し」を徒歩で渡り、吉野川北岸の人が汗を拭き、川水を飲んで見かける程、きれいで冷たい水でした。昔の水を、今は望むべきありません。

国道三一八号線の新橋が開通した頃までは、新橋の上より川底の小石が見え、湧水で砂が盛り上がっていて、モリでうなぎをとっているのを、よく見かけました。

吉野川のバラス採取と河流の変遷と、加えて都市化による急増した住宅の生活污水の流入により、今は水量は減り、汚れた水と化して昔の面影は見るべくありません。

江川は、吉野川本流であつたことは、知恵島が柿島村、粟島が八幡町で、阿波郡だったのをみても判断されるのであります。

吉野川改修工事の完成により、分断されたのですが、それまでは自然堤防の形で低かつたのです。明治六年頃、徳島刑務所の受刑者が盛土かさあげにきたと故老から聞いております。

(1) 江川堰の記録

私の家に曾祖父繁蔵の江川堰修繕中、

「肝煎役申付候事 十年三月 徳島支庁」
の辞令が残っております。

川島町より東へ伸びた堤防が、異常水温で天然記念物の水源の西の方で、北に迂廻する堤防の下に、江川堰は埋没し、わずかに突端部であろう青石を畳んだ一部が姿をみせております。

江川堰は、水害除去のためここに堰を作り、洪水時に江川に流入する水を少なくするためでしたが、洪水時には堰を溢れた濁流が川幅いっぱい流れ、流木ひろいの川舟を出しているのを父に教えられたのを、少年の頃の思い出として覚えております。

(2) 江川史談

今は見る影もないへドロ化した江川ですが、豊富なる伏流水は産業を起こしたので、古代呉島郷に呉の機織女を置くとあり、この付近の麻・楮・桑などが生成したのでしょうか。

飯尾唐人に呉羽神社の石碑が残っており、吉野川は南を流れ、そして北を流れて沖積地を残しました。鴨島、喜来、上下島地区は、中世以後より定住する人がふえたのでしよう。

仏教寺院の開基が常教寺で天文十三年頃です。中世を経て南北朝末期、細川氏が秋月より勝瑞に移り、阿波の財力を背景に京都に出て、三好、松永両氏が京都を制したことがあります。だが戦国末期鴨島町

の土豪は、多く中富川、脇城外の戦いに陣没しました。鴨島六之進、乗島入道来心もその中の人でありました。

藩政初期蜂須賀家政が入国し、播州より藍種を移し、藍作を奨励、呉島に蒔いたとあります。

たびたび起きる吉野川の氾濫により、被害を受けながらも、流れこむ土砂で土地も肥え、良質の藍を作り、吉野川兩岸は藍作地帯となり、藩の財源となりました。良質の藍玉は全国に販路を拡大し、数多くの「阿波の藍商」を生んだのであります。

耕作農民は苛酷な労働の連続でありました。わずかにその苦しさが作業歌に残されています。今は歌う人もなくなりましたが、藍こなし歌、箕さび根寄せ歌などです。

藩が藍の専売制を実施した宝暦年間、五社宮事件、俗に藍騒動が起こったのですが、本町農民もこれに参加したのです。

学村蓮光寺住職の密告により不発に終わったのですが、喜来乗島庵主常心は廻状檄文の起草に当たったのであり、乗島の駈出奉公人岸田和左衛門も主謀者の一人でした。

その時の代表者五人は宝暦七年三月十八日、鮎喰河原で処刑され、家族他の主謀者は国外追放、入牢等その数二十四名に及んでおります。

このようにして隆盛を極めた藍作も、明治に入り印度藍、化学染料の出現のため衰退の一途をたどったのであります。

藍玉の価格暴落により製藍社を起こし、本町の藍商、川真田市兵衛氏は阿波国共同汽船株式会社を、川真田徳三郎氏は徳島鉄道株式会社を起こし、物資の阪神への輸送をはかったので、一種の産業革命を行ったのであります。農家は代替作物を求め、桑園養蚕に活路を求めました。

藍畑は桑園となったので、畑には必ず野井戸があり、江川の伏流水を跳ねツルベで汲みあげ、藍畑に

灌水したのですが、戦中の水田化により野井戸は埋没して跡方もありません。

養蚕がさかんになると、製糸工場が大小いろいろにできて、最盛期は昭和初年で、数多い煙突より吐きだす黒煙は、南の山より見れば工業都市の観を呈していたのです。

第二次世界大戦前夜の昭和十四年頃より糸価の低落と食糧増産のため、桑園は水田化され、現在は筒井製糸一社を残すのみであります。

製糸産業の盛況だったのも、江川水系の良質で豊富な伏流水であったためであり、水田化の際に、江川土地改良区も吉野川遊園地の東に水源地を置き、ポンプ揚水し五十二ヘクタールに灌漑し、喜来地区では江川河川敷開田でも、江川より水をひいていました。一般でも地下水を電気モーターを原動機として灌漑していました。

野井戸を利用した農地は宅地化して、藍作に活躍した野井戸の青石の巻き立てもなくなりました。今も昔、本町産業立地の基礎は江川であり、その伏流水なのです。

野麦峠ならず製糸工場盛時、本町に集まった女子工員の夜の町への外出で飲食店はふえ、盆・年末帰省の際の土産品で商店も増加して、現在でも集辺の町村よりの人で、商店の多いことは県西屈指です。

牛島工業団地に五社の進出、一部稼動して本町に活況を与えているのも、江川河原敷であります。

唯、螢を追い、川魚をとり、四季いろいろの想いを残す清冽な水は帰ってきません。

尚、歴史について詳細は第三章に譲ります。